
幸せの、澄み切った、青い空

澄氏 新

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

幸せの、澄み切った、青い空

【Nコード】

N0120C

【作者名】

澄氏 新

【あらすじ】

アグリア王国の第二王子シグルドは、ある日突然父・レイディル国王に婚姻の話を持ち出される。渋々ながら承諾したシグルドだったが、その結婚相手は強大な呪いをかけられていた……

幸せの、澄み切った、青い空

プロローグ

「シグルド様の、お帰りー！」

アグリア王国の王宮。その門前で、凱旋のラツパが鳴り響いた。

「お帰りなさいませ」

「無事ご帰還、嬉しく存じます」

「流石はシグルド様」

配下の者達が深く頭を下げながら、アグリア王国の第二王子であり、第一騎士団の団長を務めるシグルドの帰還を喜んだ。

「全く、野盗狩りから帰還したただけだというのに、大袈裟な事だ」
隊の先頭を行く漆黒の髪、双眸を持つ美青年、王子シグルドは、大仰な出迎えに小さく溜息をついた。

広場で馬を止め、鏡のように磨かれた床に降り立つ。駆けつけた召使いに手綱を任せ、城内へと向かう。

「シグルド」

ふと呼び止められ、シグルドは歩みを止めた。

シグルドを呼び捨てに出来るのは、城内では二人しか居ない。第一王子である兄ドノヴァンと、父であり国王であるレイディルに他ならない。シグルドを呼び止めたのは、ドノヴァンだった。

「兄上が出迎えとは珍しいですね」

「それは嫌味と取って良いのかね？」

シグルドにはそんなつもりは無かったのだが、ドノヴァンの片方の眉がぴくりと動いたのを見て「まずい」と思った。が、ドノヴァンはすぐに表情を和らげ、しかし口元に怪しい笑みを浮かべながらシグルドの肩をぽんと叩いた。

「冗談だ。ところで、父上がお前に話が有るそうだ。後で王室へ行くように」

兄は普段は優しいが、よくシグルドに意地悪をするという悪癖が

有る。特に、今みたいな笑いをするときは。

「……分かりました」

一抹の不安を覚えつつも、シグルドは頷いた。

これから先、その身に降りかかる幾多の不運を、まだシグルドは知る由も無かった。

国王レイディルからの話によって、まさか自分が多難な運命を歩むことになるうとは、考えもしていなかった。

プロローグ（後書き）

覚えてある方はお久しぶり、初めての方は初めまして。

あらすじを見て「何だこれは、ベッタベタじゃねーか」と思った方も見えるとは思いますが、今回は「よくある御伽噺」をモチーフとして構成してあります。

とは言え、読んでいてツマラナイと思われないように頑張りたいと思っていますので、出来れば最後までお付き合い頂ければ幸いです。

第一章「王命」

「父上、突然何ですか、それは！？ 俺は何も聴いていませんよ！？」

広い王宮内に、突如怒声が響いた。その大声は、王室から聞こえてきたものだった。

「突然大声を出すな、シグルド」

王座に座っている黒髪の男、ここアグリア王国の王であるレイディル・フォイム・アグリアは、顔をしかめながら片耳を抑えた。

「私としては、お前の事を思ってたのだが、不満だったのかね？」

「不満も何も、当人である俺に黙って、何故そのような重大な事を取り決めるのですか！」

対する第二王子シグルドは、尚も引き下がらずに抗議した。

事の発端は、ほんの数分前。

シグルドはレイディルと呼ばれ、王室へと通された。

「おめでとう、シグルド。今日はお前に重大な発表が有る」

入るなり「おめでとう」と言われ、呆然とするシグルドに、レイディルは口元に笑みを浮かべながら続けた。

「お前の結婚相手が決まった」

王子でありながらアグリア王国の第一騎士団の団長を務め、「迅雷」の異名を持つ剣豪であるシグルドは、当年取って二四になるが、未だ結婚せずに独身のままで居た。

本人に結婚願望などは無く、またその様な話が出る機会も無かったが、唐突に結婚の話を持ち出され、冷静さを失って抗議したのである。

幸せの、澄み切った、青い空

「まあ聞け」

なだめる様に右手を上げ、全てを見透かすような黒の双眸でシグルドを見るレイディル。その威圧感に、シグルドは押し黙った。

「結婚相手の名は、ミレーネ・レフィア。年齢は今年で十八になる。ミドナ国の貴族の令嬢だ。つい先ほど、王宮に到着された」

「レフィア、と言いますと、あのレフィア家の？」

シグルドの問いに、レイディルは軽く頷いた。

ミドナ国は、アグリアの東に位置する。大量の鉱物資源を有し、近年各国で伸びつつある機工技術の最先端を行く経済大国である。

レフィア家と言えばアグリアでも有名で、精練された機工技術により作られた武器や兵器の輸出を主とし、更に多大な金鉱山の所有など、莫大な資産を持っていると聞いている。

「……要するに、政略結婚という訳ですか」

「まあ、早い話がそうなるな。しかしながら、お前も今年で二十四になる。早い所身を固めてくれれば、父としても一安心だ」

「父上、勝手な事を言わないで下さい！」

尚も食い下がるシグルド。政略結婚など御免である。

異性に関して全く興味が無いシグルドも、結婚するのであれば意中の女性が良いに決まっている。現に兄、第一王子ドノヴァンは、親の猛反対を押し切って、王都に住んでいた平民の娘を嫁に貰っているのだ。それを突然「政略結婚しろ」と言われて、承諾できる訳がない。

しかしレイディルはシグルドの叫びに対し、ふうと小さく溜息をついただけだった。

「勝手な事を言っているのはシグルド、お前のほうだ」

俺のどこが勝手だと言うのですか、と反論しようとしたが、レイディルの鷹の様な鋭い目に気圧けあされて言葉を詰まらせた。

「お前の婚姻によって、我がアグリア王国は莫大な利益を得るのだ。具体的に言えば、ミレーネ嬢の持参金だけで、国庫はこれから先四、五年は安泰する。更に、我が国には無い最先端の技術、多くの金鉱山、そして広大な土地の譲渡を約束されているのだよ」

アグリア王国は確かに小さな国ではあるが、国庫の四、五年分の持参金と言えば王族並みかそれ以上である。シグルドも流石に驚きを隠せなかった。

「この婚姻は我が国、そして国民にとって大きな利益となる。どうかね、シグルド。これを王命とするには相応しくない事だと思うかね？」

シグルドはたじろいだ。流石に「王命」を持ち出されては、沈黙するしかない。しかし、納得できるかどうかは別である。

「無礼を承知でお訊きしますが」

しばらくの沈黙の後、搾り出すように切り出した。

「何だ？」

「その持参金に頼らねばならないほど、我が国は貧窮ひんきゆうしているのですか？」

アグリアは他国と比べて機工技術も発展しておらず、大規模な鉱山なども無いが、独特の文化を持つ「富める小国」と言われている。しかし、それは表向きだけであって、実際は違っているのだろうか？ もしそうなのであれば、政略結婚の話が持ち出されるのも仕方無い事だろう。

ただ、この問いに父が頷くとは思えなかった。そして思った通り、レイディルは問いに対して目を伏せ、うつむいてしまった。もし頷いてしまえば、それほど国庫が貧窮するまでに政策が取れていない事、言わば国王として無能である事を自ら肯定する事になるからだ。だが、シグルドはそんな父の様子を見、自分が今置かれている状況を理解した。

納得はいかないが、仕方が無い。

「父上、ミレーネ殿は何処に？」

重い沈黙を破るように、シグルドは切り出した。

「今は専用の部屋を仕立て、そちらで休んでおる。侍女に案内させよう」

言って、レイディルは二回ほど手を叩いた。王室に入ってくる者

幸せの、澄み切った、青い空

は無かったが、扉の外に一つ気配が増えたのをシグルドは感じ取った。前もって命令を下していたのだろう、手早いことだ。

「分かりました」

小さく礼をして、シグルドはくるりと踵かかとをかえした。

扉を開けようとした時、背後から「すまないな」と小さく聞こえたが、振り向かずに「いえ」とだけ短く答え、王室を後にした。

いつも冷静沈着で自信に溢れている父の、申し訳なさそうな、情けない顔を想像すると、振り向くことが出来なかったのである。

第二章「決意」

侍女に案内されて辿り着いた扉の前で、シグルドは固まっていた。ミドナ国からの旅で疲れているだろうが、挨拶くらいはしておくべきと考えてミレーネの元を訪ねたのだが、挨拶だけで済ませるのは流石につまらないだろうし、かと言って無骨者であるシグルドは、女性の喜びそうな話など出来はしない。

女性の前で固まるなど見つとも無い姿を晒す訳にもいかないし、どうすべきかと考えて立ち尽くしているのだ。

しかし、いつまでもこうしては居られないと、意を決してノックしようとして手を伸ばした時、

「兄上、先ほどからそこに居るのでしょうか？ 早く入ってきなさいな」

中から聞き覚えの有る声が出た。

「何だ、ファーニヤも居たのか」

妹のファーニヤは、アグリアが有する独特の文化の一つであり、王家の者が代々引き継いできた「魔術」の力を強く受け継いでいる。近年各国から失われつつある「魔術」の力を、長い年月を経て今現在も受け継いでいるのは、世界広しと言えどもアグリア王国の他に無い。

しかし王族であるものの、シグルドにはその様な力は一切備わっていない。その為、一体どういう力を使い、どの様に作用しているのか分からないが、扉の向こうに居る者を察知するくらいは朝飯前な事らしい。

「居るなら居ると言ってくれば良いものを」

立ち往生する自分の姿を見て笑っていたのだろうかと思うと、少しだけ腹が立ったが、ミレーネと一対一で話すよりは気分的に楽だと思った。

「ミレーネ殿、失礼致します」

コンコンとノックして、シグルドは部屋に入った。
途端、驚いて目を皿にした。

「こ、これは一体」

「驚かれるのも無理は有りませんわね」

部屋の中は、天蓋付きの豪華な寝台が一つと、妹のファーニヤが座っている椅子が有るだけで、ひどく殺風景だった。とても来賓を
持て成す場所には見えない。

おまけに、室内にはシグルド、ファーニヤ、そして寝台に横にな
っているミレーネ以外の人影も無い。付き人や召使いの姿は無かつ
た。

「父上は何を考えているのだ。これがわざわざ隣国から出向いて頂
いた令嬢に対する持て成しか!」

シグルドが心の中で吐き捨てると、ファーニヤが目を伏せた。

「仕方ないですよ、兄上」

「どう言う事だ、ファーニヤ。説明してくれ」

言われて、ファーニヤはミレーネの方に顔を向けた。シグルドも
寝台に歩み寄り、その顔を覗きこむ。

ミレーネは眠っているように見えた。清流のような金髪が窓から差
し込む陽光を受けて輝き、若干幼さを残した顔立ちではあるものの、
美しかった。

最初は長旅で疲れているのかとも思ったが、その顔は青白く生氣
が無い。さながら死者の様なその様子を見て、シグルドは事の異常
さを察知した。

「ミレーネ様は、強い呪いをかけられ、伏せっておられます」

「何だって!？」

突然大声を出され、ファーニヤは一瞬びくつと肩を震わせた。
衝撃的だった。まさか政略結婚の相手が呪いをかけられていると
は、思ってもみなかったのである。

「兄上は、レフィア家の事をどれくらい知っておいでですか?」

唐突に訊かれ、シグルドは首を左右に振った。レフィア家の事は

国内でも有名ではあるが、内情については知る筈もない。

「知っているも何も、貴族で有名な資産家であるという事くらいなものだ。ミレーネ殿との婚約の話も、つい先ほど父上から聞いたものでな。むしろ何も知らないと言ったほうが良いかも知れん」

先ほどレイディルから、ミレーネが呪いを受けていると教えて貰えなかった事に怒りを覚えた。確かに、教えればシグルドは何が何でも断固拒否していただろうが、こんな重大な事を伏せておく父に對して、かつて無い程の憤りを感じた。

「では、ミレーネ様の実家の事から説明致します」

シグルドはミレーネを顔を見ながら、「ああ」と小さく言った。一体何故、十八の少女がこの様な事態に陥っているのか、想像もつかない。

「元はレフィア家は、今ほど大きくない……いえ、むしろ小さな家柄でした」

ファーニヤの説明によると、今でこそ莫大な財を築き上げているレフィア家も、その昔は領土も小さく、資産家としては全くの無名だった。

しかしミレーネの祖父の代に、没落寸前だった他の貴族の娘を娶り、その領地を丸ごと吸収。更に他の名門貴族やミドナ王家との縁続きなどの家柄との婚姻を様々な方法で成立させ、領地を拡大し、そこから掘り出された鉱山などを利用し財を成していった。

いわゆる「成り上がり貴族」である。

それを聴いて、シグルドは目を丸くした。

いくら今の姿が有るとは言え、そんな成り上がり貴族と、小国ながらも長い歴史と独特の魔術文化を持つアグリア王家との婚姻話が果たして成り立つものか。

「しかし、レフィア家も現在の財を成す為に、大勢の人の恨みを買ったような事をしてきた様ですね。特に詳しくは教えられていませんが、名門貴族との婚姻を迫る際には、暗殺者を使役したとも聴いています」

貴族に限らず国家間のいざこざでも、そういった黒い策略はよく有る話だが、たった二世代の間に無名から名門へと申し上がったとなると、どれほど汚い手を使ってきたのか想像も出来ない。思わずシグルドは渋面になった。

「しかし腑に落ちないな」

何故父や祖父ではなく、ミレーネに呪いが集まったのか、呪いを受けるべきは彼女ではないはずなのに。

「元はミレーネ様の父に呪いが降りかかっていたそうですが、ミレーネ様がその全てを自身に取り込んだそうですわ」

シグルドの心中を察したか、ファーニヤが言った。ひよっとすると、その魔力で心の中を読んだのかも知れない。

「そんな事が出来るのか？」

言われて、ファーニヤはふるふると首を左右に振った。

「普通は呪いの対象を移す事は出来ないはずですが、それが出来たと言うことは、それほどの力がミレーネ様に有ると言う事」なるほど、とシグルドは思った。レイディルは、当然持参金の事も有るだろうが、ミレーネに備わっている魔術の力を所有物にしたかと思っているのだろう。

更にファーニヤが言うには、ミレーネの父は彼女の呪いを解く事を前提に、持参金を惜しまず出すことを誓っていると言う。

「全く父上は、何故こうも重大な事を幾つも隠しているのだ」

喉の奥で唸るシグルドを見て、ファーニヤは再び目を伏せた。

「ファーニヤ、その呪いとやらは、お前の力で何とかなるものなのか？」

しばらく沈黙した後、シグルドはそう問いかけた。ファーニヤは目を閉じて首を左右に振った。

「呪いの侵攻は私の力で抑えています、治すまでには至りません。かなり強い力が無くては、払うことは不可能でしょう」

王家始まって以来の大魔力を有するとまで言われている妹でも、治せないほど強い呪い。それを払う事の出来る者が、果たしてアグ

幸せの、澄み切った、青い空

リア一族の者以外に居るのだろうか。

しかし、根っからの武人であるシグルドは、いくら政略結婚が嫌だとは言え、このままミレーネを放っておくなど出来はしない。

「何か他に方法は無いのか」

意を決して、シグルドはファーニャに訊いた。その瞳は真っ直ぐで、必ずミレーネを助けてみせるといふ強い意志を秘めていた。

第三章「迅雷」

ミレーネの姿を見た翌日の早朝、シグルドは西に向かって馬を走らせていた。

ファーニヤの占いにより、ミレーネの呪いを解く方法は西の森に有ると言われたからだ。

占いと言っても、単なる「当てずっぽう」のものとは違う。アグリア王家きつての魔力を持つ彼女の占いは、百発百中と言っても過言ではないくらい的中率を誇るのだ。占いと言うよりも予知に近いが、具体的な方法が分かるわけではない為、ファーニヤ本人が「占い」と言っているだけである。

アグリアの王都を出てから馬車で二日ほど行った場所には、広大な大森林が広がっている。

高級な薬草などが多く採取される場所だが、奥深くは磁石も利かず、一度入ると二度と出られない死の樹海となっている場所だ。人々はそれを「冥土の入り口」と呼んでいた。

「ファーニヤの言っていたものが、冥土の入り口に無ければ良いのだが」

流石の「迅雷」も、そこに迷い込んで生きて帰れる自信は無い。しかしミレーネを治す方法が何であるか分からない以上、覚悟は決めておいたほうが良いかも知れないと思った。

「薬草の類であれば楽なのだが、どうも胸騒ぎがしてならないな」
そう思い、いやいや、と大きく頭かぶりを振った。ミレーネを救うと決めたのだ、今からそんな事を考えてはいけないと気を持ち直す。

途中、馬を休ませるために小休止を挟んだが、太陽が西の空に落ち始めた頃、シグルドは大森林へと入った。よく訓練された彼の愛馬は、乗り手であるシグルドに似て頑健に育てられている。二日はかかるはずの距離も、一日もかからずに難なく走りきった。

沢山の木々に日の光を遮られ、森の中はひんやりとしていた。も

う日は沈みかけているが、ここは既に夜の暗闇に包まれている。

流石の愛馬も、森の中では歩みが遅くなる。深い闇の中を進ませるわけにもいかず、シグルドは馬を止めて地面に降りた。

「今日はここで野宿するでしょう」

騎士団の訓練で、野宿には慣れている。地面に腰を下ろし、手際良く火を起こした。

しかし、突然の結婚話に驚き、その相手が呪いをかけられていると知らされ、そして今、こうして呪いを解く方法を探しているとは、我ながら数奇な運命に見舞われたものだと思う。王子様がお姫様の呪いを解いて結婚、というと、御伽噺に似たような話は幾つもあるが、まさかその王子役をやる事になるうとは。

元凶である父レイディルに対する怒りは未だ冷めきらない。恐らく父は、こうなる事を予想して事を運んだのだろう。巧く嵌められたとは思うが、逆らえずに行動する自分の姿も妙に滑稽だと思った。「全く、俺もお人好しだな」

シグルドはぼんやりとそんな事を考えていたが、ふと何かに弾かれる様に傍らに置いた剣を取り、辺りを見回した。辺りは静まり返っているが、彼の耳には確かに聴こえたのだ。

火にくべた小枝がパチンと弾けた。その瞬間、「あっちか」と呟いたシグルドは、地を蹴って走り出した。

「嫌、嫌！ 何なのよ、離してよ！」

暗い森の奥で、少女が数人の男達に取り囲まれていた。

「こんな時間に森をうろつくもんじゃ無いぜ、お譲ちゃん」

「今時分、誰も助けになんか来やしねえよ。おとなしくしてな！」

見た目十五、六ほどだろうが、暗闇でもよく分かる金髪に翡翠色の瞳を持つ美しい少女は、突如現れた暴漢達をキツと睨み付けていた。普通なら顔が恐怖に歪む所であろうが、気丈な性格であること

が伺える。

「いい加減にしなさいよ！」

羽交い絞めにされながらも反抗する少女に、暴漢の一人が「うるせえ！」と汚く吐き出しながら右手を振り上げた。少女は尚も、殴りかかるその男を睨み付けている。

しかし、男の拳は少女に届かなかった。届く前に斬って落とされたのである。ずっと目を閉じず、果敢に男と対峙していた少女にも、一閃の光が走った様にしか見えない斬撃だった。

遅れて、男の絶叫が森の中に響いた。

「何だ、てめえ！」

「その娘を離してもらおう。さもなくば、全員この場で斬って捨てる」

闇に溶ける漆黒の髪と瞳は、シグルドのものだった。少女の悲鳴が聴こえた為、即座に駆けつけたのだ。全力疾走でここまで向かったのに息一つ乱していないのは、彼の頑健さと厳しい訓練の賜物である。

「格好つけてんじゃねえ！ 邪魔するんなら命は無えぞ！」

「ふん、悪党の見本の様な事を言う奴だな。もう少し気の利いた事は言えないのか」

まるで本の世界に出てくる典型的な悪役の様な台詞に、シグルドは苦笑しそうになった。次の言葉は「やっちまえ」とでも来るか、と思っていたら、

「やっちまえ！」

予想通りの反応に、思わず吹き出しそうになりつつも、ぐっと堪えて剣を構える。

「この俺に挑むとは、命が惜しくないようだな」

これは驕りおこでも何でも無い。「迅雷」の異名は伊達ではない。

襲い来る男達の動きは、大きく暴力的だった。これは確かに自分を強く見せ、相手を威嚇するには効果を発揮するが、それは素人に対してのみである。

シグルドが闘刃を横一閃にするや、一人目の首を瞬時に跳ね上げた。更に返す刀で続く二人目の胴を断つ。背後から忍び寄っていた男の気配を察知し、振り下ろされた鉞なたを振り向きざまの剣閃で弾き返し、がら空きになった胴を逆袈裟に斬り上げた。

次々に襲いかかる暴漢を一閃の元に葬り、残るは少女を羽交い絞めにしてている男だけになった。

「全く、これでは訓練での模擬戦のほうか、まだ緊張感が有る」

返り血一つ浴びずに立っているシグルドの姿を見て、男が声にならない悲鳴を上げた。

「貴様で最後だな」

「ひいっ！」

剣先を突きつけられた男は少女を突き飛ばして離し、腰に下げたラッパの様なものを取ってシグルドに向けた。この辺りではあまり見ない、銃と呼ばれる武器である。近年、剣や槍の代わりに普及しつつある機工武器で、鉛の弾を高速で打ち出すものだ。その殺傷能力は、従来の武器を大きく上回る。

その銃口を突きつけられれば大半の者は戦意を喪失するだろう。が、シグルドはこれに向かって駆け出した。

まさか銃に向かってくるとは思ってもみなかったのか、男は驚き恐怖で歯をガチガチと鳴らしたが、迫り来るシグルドに向かって引き金を引いた。

鉄板を金槌で思い切り打ち叩いたような轟音と共に凶弾が発射されたが、シグルドはこれを走りながら両断した。この素早い剣閃こそが、シグルドが「迅雷」と呼ばれる理由にある。

次の弾丸を打ち出す前に喉を斬られ、最後の一人がゆっくりと地面に倒れ伏した。

第四章「少女」

「大丈夫か？」

剣に付いた血を一振りして払い、鞘に納めつつシグルドは少女に問いかけた。死体を見ないようにしてか、少女は固く目を閉じている。

「立てるか？」

少女に歩み寄り、スツと手を差し出す。が、予想外にも、少女にその手を鋭く払われた。硬く閉じていた目を開いたと思ったら、シグルドをじつとりと睨んでいる。

「何なのよ、あいつら！ あんたも！」

差し出した手を払われて驚いたが、混乱しているのだろうと思い、手を引つ込めた。若い娘に見せるには、確かに刺激の強い現場だったろう。

「恐らく人さらいの類だろう。お前をさらって、金持ちや奴隷商人、もしくは花街にでも売るつもりだったのだろう」

忌々しい事ではあるが、こういった犯罪を撲滅するのは難しい。警備隊や騎士団で見回りや取締りをしているものの、未だこうした下賤な輩が跋扈はつこうしているのが現状である。しかし現場を見てしまつた以上、成敗するのが騎士として、王族としての勤めだと、シグルドは思っている。放っておけば被害が増えるからだ。

「俺はシグルド。この森に入ったところ、お前の悲鳴が聞こえたので駆けつけたのだ」

「別に私は、助けくれなんて言っていない！」

こう言われては、流石にシグルドも少しばかり苛立ちを覚える。気丈な事は良いことだが、あのまま放っておけばどうなっていたか、分からないわけでもないだろうに。

「もう少してさらわれそうになっていた所だぞ。まさか奴隷になりたいなどと言う訳ではないだろう？」

「あんな奴らなんか、私だって何とか出来たもの。第一、奴隷とか花街だとか、何なのよ、それ。聞いた事無いわ」

今度は、苛立つよりも驚いた。「私だって何とか出来た」という台詞は、この少女なりの強がりだろうと解釈したが、「奴隷だとか花街だとか、聞いた事が無い」とは。

見たところ、年頃の女性ではあるが、人さらいに遭ってその先どうなるかを想像出来ない訳はないだろう。もし本当に知らないとなれば、どこぞの貴族の箱入り娘か。しかし、着ている服はぼろぼろで、薄汚れていてあちこち擦り切れており、とてもその様には見えない。

よく考えてみれば、何故このような時間にこんな所に一人で居るのかも分からない。

「まさかお前、妖あやかしの類ではないだろうな」

「違うわよ、失礼ね！」

顔を真っ赤にしながら反論する少女だが、腑に落ちない点が多すぎる。どうしたものかと考えていると、今まで座りこんでいた少女が立ち上が……ろうとして、力が抜けたように、またぺたんとその場に座りこんだ。もう一度立ち上がるうとして、またぺたんと座りこむ。何度立ち上がるうとしても、足に力が入らないのか立ち上がれない。

その様子を見て、シグルドは思わず吹き出した。少女は更に顔を真っ赤にしながら「何で笑うのよ！」と怒鳴ったが、その様子を見たシグルドはとうとう声を上げて笑い出した。

「笑わないでよ、馬鹿、馬鹿、馬鹿！」

「はっはっは、いや、済まない。しかし強がるのはその辺にして、素直に手を借りたらどうだ？」

少女はしばらく唸っていたが、観念したのかシグルドに手を差し伸べた。シグルドはそのままぐいっと少女の体を引き寄せ、抱え上げた。よく分からない部分ばかりだが、どうやら悪いものではない様だと思い、彼女の素性についてはまた後で訊く事にした。

「そう言えば、まだ名前を聞いて居なかったな。何と言う？」

先ほど火を起こした場所に戻ったシグルドは、彼が与えた毛布に包まっている少女に訊いた。流石に夜の森は冷え込む。

「ラケシス」

少し沈黙した後、少女はそれだけ、短く答えた。何を怒っているのかシグルドには全く分からなかったが、相変わらずラケシスと名乗った少女は今だに彼を睨み付けている。まああれだけ凄惨な場面を目撃したのだから、仕方あるまい、とシグルドは思うことにした。「今日はもう無理だが、夜が明けたらお前を家まで送り届けてやるう。ご家族の方も心配している事だろうしな」

この近くの村の者だろうと思っただけだが、言い終わらないうちに、シグルドめがけて木片が飛んできた。さっと払ってラケシスを見やると、彼女は更に眉を吊り上げて顔を真っ赤にしていた。

「嫌！ 帰らない！ 心配なんかされてない！」

さては家出娘か、とシグルドは思った。森に入ったのも、親の目を逃れる為だろうか。見た目は十五、六歳くらいに見えるが、それよりもずっと幼い子供の様だと感じた。

「何を言う。子の事を心配しない親など居るものか」

「されてないっいたらされてないの！ 絶対に、あんな所になんか帰らない！」

親にそれほど酷い虐待でも受けていたのだろうか、ラケシスは頑なだった。仕方あるまい、とシグルドは小さく溜息をついた。

「この様な事に肩書きを使うのは気持ちの良いものではないが」

喚くラケシスを咳払い一つで黙らせ、シグルドは大きく息を吸って口を開いた。

「俺はシグルド・フォイム・アグリア。このアグリア王国の第二王子であり、アグリア七騎士団の第一騎士団団長を務める者だ。お前

を親元へ送り届けるのは王族として、騎士団としての義務であると思っている。……もし逆らった場合はどうなるか、分かるな？」

家出をした子供を助けるのは、これが初めてではない。むしろ、今まで何度もラケシスの様な子を見てきた。

その度に使っているのが今の台詞であり、これを言えばどんな頑固者でも親元に帰っていった。半ば脅迫に近いが、こうでも言わない限り、嫌嫌の一点張りになるケースが大半だった。

しかし、

「名前ならさつき聞いたわよ。第二王子が何だとか、騎士団がどうだとか、そんなの知らないわ。何を言われたって、私は帰らないったら絶対帰らないから！」

これまた意外な返事が帰ってきた。王族に、騎士団に逆らう事は重罪なのだが、それすらも突っぱねるとは、想像もしなかった。それに、今初めて名乗ったフルネーム　アグリア王家の名を聞いたにも関わらず、この態度。しかも「名前ならさつき聞いた」という返答。流石にアグリア王家の名を知らない者は、国内に限らず隣国の者でも居ないだろうに。

「この少女は、一体何処から来たのだ!？」

シグルドが目丸くして少女を見てみると、不意にまた木片が飛んできた。「何見てるのよ、馬鹿!」と、顔を紅潮させている。今度はシグルドの額に命中して、ぱさりと乾いた音を立てて地面に落ちた。

もうこれ以上は何を言っても無駄だろう。明日の朝になったら、無理やりにも近くの村まで連れて行けば、彼女も観念するだろうと思ひ、今日の所はこれ以上は何も言うまいとシグルドは口を閉じた。

「もう夜も更けてきた。お前はもう休め」

ミレーネの呪いを解く為の旅に出て初日だったが、思わぬ事態に遭遇し、流石の「迅雷」シグルドも、精神的に疲れていた。ラケシ

スも疲れているだろうと思ひ、そう切り出した。

「……シグルドは寝ないの？ 寒くないの？」

「俺の事は気にしなくて良い」

寝ている間でも、誰かが近付けば飛び起き、戦闘体勢を整える事が出来るよう、訓練を積んでいるシグルドである。眠っても何ら問題は無いのだが、ラケシスより先に眠ってしまったのは、彼女を不安にさせるのではないかと思つての考慮である。寒くないわけではないが、これしきで風邪を引くような、やわな体の作りはしていない。しばらく黙つてシグルドを見つめていたラケシスだったが、ふと立ち上がつて、とことことシグルドの傍に駆け寄り、二人とも掛かるように毛布を広げた。

今までの態度との急変ぶりに少し驚いたシグルドだったが、「ありがとう」と小さく礼を言つて、ラケシスの背中を軽く叩いてやつた。

しばらく後、安らかな寝息が聞こえてきたのを確認して、シグルドも目を閉じた。

第五章「魔術」

シグルドは弾かれたように目を開けて、傍らに置いてあった剣を取った。何者かの気配を感じ取り、飛び起きたのだ。

「どうしたの、何か出たの!？」

ラケシスも起こしてしまったか、彼女は突然の張り詰めた空気に身を強張らせていた。

「しっ」

人差し指を唇に当て、黙るように言う。辺りはしんと静まり返っており、動物や虫たちももう眠っている時間だろうが、確かに何か動いた気配がしたのだ。

「……何か居るの?」

「大丈夫だ」

不安そうに表情を曇らせるラケシスを安心させるように優しく笑い掛け、再び森の奥の暗闇に視線を戻す。

しばらくの沈黙。

「何も居ないんじゃない」

何も起きない為に安心したが、ラケシスが口を開いた。が、言い終わる前に、彼女の声は悲鳴に変わった。驚いて振り向いたシグルドの視線の先には、ラケシスの他にもう一つの影があった。夜目は利く方だが、いかんせん暗すぎて姿を確認するまでには至らなかい。しかし、片手でラケシスの首元を締め上げ、束縛している事は見て取る事が出来た。

「まさか、この俺に気付かれずにここまで忍び寄りとは!」

どれほど卓越した使い手を相手にしても、気付かないはずは無いと思っていたシグルドだったが、これには驚きを隠せなかった。先ほどの暴漢の仲間かと思ったが、それにしてもは気配を殺す技術が卓越しすぎている。

「貴様、何者だ」

剣の柄に手を掛けながら、シグルドは問うた。明かりが無い為、相手の顔がよく見えない。

「お前こそ何者だ。ラケシスを拐かかどわそうとする輩か！」

シグルドに逆に質問を投げかけた声は、女のものだった。

「違うわよ！ シグルドは、私を……」

ラケシスは、そこまで言って言葉に詰まった。助けてもらった、とは言い難かったのだろうか。しかし、この会話から察するに、どうやらラケシスの知り合いである事が伺えた。

「とにかく、シグルドは悪い人じゃないの！」

その言葉を聴いて、女は「ふん」と鼻を鳴らした。

「シグルド、って言うのか、お前。ラケシスに何を吹き込んだのか知らないが、この子は連れて帰るからね」

ラケシスから散々馬鹿と罵られた次は、お前呼ばわりか、とシグルドは渋面になった。様付けしろなどと傲慢な事を言う訳ではないが、せめて名で呼んでくれと思う。

「吹き込んだなど、誤解もいい所だな。俺は暴漢に襲われていたその子を助け、明日にでも近くの村へと送り届けるつもりだった」

そう言っ事の経緯を説明しようとしたが、「どうだか」と短く遮られた。どうも信用されて居ない様である。一体どうしてここまで敵意を剥き出しにされなければならないのかと、シグルドは頭が痛くなる思いだった。

ふと、暗闇の中から手が伸びてきた。女性の細腕である。

何をするつもりかと身構えていると、突然「逃げて！」とラケシスの声が響いた。反射的に横に飛び退いたその瞬間、伸ばされた手の平から突然炎の球が放たれ、地面に落ちた小枝や枯葉の山に火をつけた。

「こいつ、魔術を使えるのか！」

アグリア王家の者だけが魔術を使える訳ではないとは言え、その力を持って生まれる者は少ない。また、魔力を持って生まれたとしても、せいぜい釜戸の火を点ける程度の弱いものでしかない事が大

半だ。一体、この女性は何者なのだろうか。

体勢を整え、ラケシスを束縛する女に向き直るシグルド。が、その顔を見た瞬間、驚きで目を見開いた。

ラケシスを捕らえている女の顔は、ラケシスと瓜二つだったのである。違っているのは、美しい銀髪と、透き通るような碧眼だけだった。

「お前は何者だ」

先ほどと同じ問いを投げかける。少し前のラケシスと同じく、銀髪の少女はシグルドを睨み付けていた。

「私はドルチェ。この子の双子の姉だ。本当にラケシスを返すつもりならば、その剣を納める。話はそれからだ」

「嫌！ 帰りたくない！ 助けてよ、シグルド！」

ラケシスがもがきながらそう叫ぶが、シグルドは少し考えた後、剣を鞘に納めた。しかし、不意打ちを受けては堪らない為、いつでも抜刀出来るように柄には手を掛けたままだ。その様子を見たドルチェが、また鼻をふんと鳴らした。

剣を納めたシグルドを見て、ラケシスが「シグルドの馬鹿、裏切り者！」と手足をばたばたさせたが、ドルチェの言う事が本当であれば、ラケシスには悪いがこれも仕方ないことだ。

「嘘は言っていないかったようだな」

「当然だ。アグリア王国騎士団団長の名にかけて、俺の言葉の全てに、嘘偽りは無いと誓おう」

ドルチェがゆっくりと手を下ろした。シグルドも柄に掛けた手を離す。ラケシスが今だ観念せずに騒いでいるが、気にしないことにした。

「この子を助けてくれたことには、礼を言っておく」

静かに言って、ドルチェはパチンと指を鳴らした。すると、途端に辺りの木々に燃え移りそうになっていた炎が消える。辺りは再び、深い暗闇に包まれた。

それから彼女はシグルドの姿を一瞥もせず、そのままくると

踵を返した。騒ぐラケシスを気に止める様子は無い。そのうちラケシスも観念したのか、黙ってぐったりとなった。
「可哀想だが、これで親元に帰れるのであれば、彼女にとっても良いだろう」

そう思っただけで去って行く二人の姿を見ていたシグルドだったが、突然、

「嫌だったら嫌ーっ！」

ラケシスが叫び、その瞬間、彼女の体が輝いた。

「何をやる、やめる、ラケシス！」

続いてドルチェの声が聞こえた。ラケシスの身に何が起こったのか掴めないが、シグルドは弾かれたように走り出した。しかし、ラケシスから放たれた強大な波動に弾かれ、吹き飛ばされて尻餅をついた。

「ラケシスも、魔術の力を持っていたのか」

どうやら暴漢たちに対して気丈に振舞えたのも、これだけの力を持っていたからの様だ。立ち上がって剣を抜き、再び走り出すシグルド。剣で何とか出来るとは思えなかったが抜刀したのは、気の安定を保つためだろうか。

見れば、ラケシスの輝きは更に増し、彼女の周りの木々は、彼女を避けるように歪に湾曲していた。ドルチェは無事な様であったが、その表情は驚きと焦りを露にしていた。

「私は、絶対、あんな所になんか帰らない！」

ラケシスの声が響いたその瞬間、森の中は極光に包まれた。

第六章「人形」

シグルドの背で、小さな呻き声が上がった。

「目が覚めたか」

背負ったラケシスの声だった。既に夜は明けていて、森の中は微かに届く木漏れ日で明るくなっていった。馬を使っていないのは、あのラケシスの光に危険を感じたシグルドが、自ら帰したからだ。利口な馬だから、乗り手が居なくとも、アグリア王宮まで戻ってくれるだろう。

「お前は昨日、あの後気を失ったのだ。ドルチェの姿は無かった」
流石に彼女の力に危険を感じたのか、ドルチェはいつの間にか消えていた。

ラケシスが光を放った後、辺りは特に変わりなく、夜の暗闇と静けさを取り戻したのだ。しかし、あのまま暴走していたら惨事になっていた事だろう。妹のファニーヤがまだ幼い頃、似たような事が有った為、シグルドはそれを容易に想像する事が出来た。

「あの時は大変だったな」

宮殿の一部が破壊され、修繕にどれほど長い時間と莫大な費用がかかったことか。巻き込まれた者は無かった為、建物が壊れただけで済んだが、もし自分が巻き込まれていたら、今ここに立ってはいないだろうと思う。思い出すだけで、今でも寒気が走る。

不意に、ぼかぼかと頭を叩かれた。

「降ろしてよ！ 見つともないじゃない！」

耳下で大声を出されて耳が痛くなったが、シグルドは言われたとおりラケシスを地面に降ろした。「別に誰かに見られている訳でもないだろうに」とシグルドが頭を掻いていると、ラケシスからキツと睨まれた。

「シグルドの裏切り者！」

唐突に言われ、シグルドは啞然とした。昨夜もドルチェが現れた

際にも言われたが、別にシグルドは彼女を裏切ったつもりはない。「我俣を言っではいけない。お前の姉は、わざわざ夜の森の中を、探しに来てくれていたのだぞ」

「だって、帰りたくないんだもの！」

シグルドの言う事を聞かないように、自分の主張を喚き散らすラケシス。全く、これでは小さな子供と何ら変わりはないではないか。「一体、どういった理由があるのだ？　そこまで頑なになるという事は、それなりの理由が有るのだろう」

シグルドが訊くと、ラケシスは口をつぐんだ。やはり簡単には訊き出せないのだろうかと思っていると、ラケシスはそのうちゆつくりと口を開いた。

「私と姉さんは、ソラス・ナクルっていう魔法使いの所に居たの」

「ソラス・ナクルだって!？」

ソラス・ナクルと言えば、伝説の大魔術師の名前である。枯れた大地を緑溢れる野原に変え、また一つの国を一昼夜で滅ぼし、更には邪悪な竜を倒したとまでされている。しかしそれらは「伝説」の範疇はんちゆうを出ない。

それに、ソラスの伝説と言えば、既に御伽噺として語り継がれるまでになっている。シグルドも幼い頃、ソラスの冒険譚を母から聞いていた。アグリア王家始まって一千年の間、ずっと語り継がれているこの話の主が実在するとは思えなかった。もしラケシスの言う事が本当だとしたら、ソラスは千年の時を生きている事になる。

しかし、かの大魔術師の生まれ変わりと称する魔術師は、確かに時折王宮にやってくる。当然、それらはただの誇大妄想持ちや、フアーニヤにすら敵わない下級術師だった。ラケシスやドルチェの魔術の力を見る限りでは、確かに優れた使い手なのだろうが、ソラス・ナクルを名乗るとは、よほどの自信家なのだろうと思った。

シグルドの大声に驚いたのか、ラケシスはびくつと一歩下がった。「驚かせてすまない」と謝ると、ラケシスは更に続けた。

「でも昨日、私はそこを抜け出したの。ずっとずっとソラスの所に

居て、外に出た事が無かったから……どうしても、外の世界を見た
くって」

ラケシスにとって、外の世界は刺激に満ち溢れたものだった。初
めて見る植物、動物、木々の隙間から見える星空、全てが彼女にと
って、未知の物だった。

生まれてずっと外に出して貰った事がない、というのも不憫な話
だな、とシグルドは思った。次期国王となる兄ドノヴァンは、シグ
ルドと違って城の外にあまり出してもらえない。その兄の姿を幼い
頃から見ているシグルドには、何となくラケシスの気持ち分かる
ような気がした。

「でも、その後、あの変な連中に捕まって……」

「俺と出会った、という訳か」
なるほど、事の経緯はよく分かった。

「しかし、帰らないかどうかは、それとまた別の問題だ。姉が迎え
に来たと言う事は、お前の親、ソラス殿も心配しておられると言っ
ことだろう」

「違うわ！」

シグルドの言葉を遮るように、ラケシスは叫んだ。

「ソラスは、私や姉さんが外に出る事を嫌がってるだけなのよ！
だって私たちは」

そこまで言っつて、急に言葉に詰まった。シグルドが厳しい顔にな
る。「私たちは、何なのだ？」、やはり妖の類なのか。

目を伏せ押し黙っていたラケシスだったが、緊迫した空気に耐え
られなくなったのか、

「私たちは、ソラスに作られた人形だから」

そう喉の奥から搾り出した。シグルドは驚いた。

「人形だと？」

シグルドの問いに、ラケシスは静かに頷いた。見た目は人間その
もので、体温や表情、感情も有る様なのに、これが本当に人形なの
か。背負った時の肌の感触も人間のそれと全く変わりは無かった。

「私たちが外に出て、人間に見つかれば、きっとその力を求めた人間が自分の所にやってくる。ソラスはそう言ってた。だから、私たちをずっと閉じ込めてたのよ」

ラケシスの翡翠色の瞳に、じんわりと光る雫が浮かんできた。人形なのに涙も流せるのか。

「だから、戻ったらもう二度と外に出られなくなっちゃう！ だから帰りたくない、帰りたくないの！」

堰を切った様に、ラケシスは泣き出した。困ったシングルドはしばらくどうしたものかと悩んでいたが、とりあえず落ち着かせようとラケシスを抱きかかえ、背中を軽く叩いてやった。流石にシングルドも、これ以上彼女に「帰れ」などとは言えなかった。

しかし、人形を動かし、意思を持たせることが持たせる事が出来るほどの魔術師、ソラス・ナクルとは何者なのか。ひよつとするとソラスに訊けば、ミレーネの呪いを解く方法が何か分かるのではないか。

そう考えたシングルドだったが、ラケシスの泣きじゃくる姿を見ては、とても切り出せなかった。

第七章「封印」

ラケシスが泣き止んでから、ようやくシグルドは重大な事に気が付いた。

馬を帰してしまった為、一度食料を調達しようと思い、眠っているラケシスを負ぶって森を抜けようと歩いていたはずが、どうやら足を踏み入れてはならない場所 「冥土の入り口」へと入ってしまったていた様なのだ。

磁石を頼りに歩いていたのだが、どういう訳か迷い込んでしまったらしい。手に持った磁石針は、今やどちらの方角を指し示す訳でもなく、ぐるぐると回っている。

「なあに、それ。ぐるぐる回ってて、面白いわ」

そんな事は知らずか、ラケシスは妙に元気だ。泣き止んで、気分も晴れたのだろうか。帰れと言えばまたむくれるのだろうか。

「これは磁石という道具だ。本来なら、この針が北を指し示してくれる」

ぐるぐる回って面白いという事は決して無いのだが、無知とは素晴らしいものだ。お陰で変に不安にさせずに済む。

方角も分からず、何処へ向かうべきかも分からずに、シグルドは歩き続けた。まさかここで野垂れ死にしてしまうのでは、と考えてしまい、気が滅入った。

ふとシグルドの後ろを歩いていたラケシスが、たたたとシグルドの横に駆けて来て並んで話しかけてきた。

「シグルドは、何歳なの？」

「今年で二四になる」

「お嫁さんは居るの？」

唐突な事を訊くな、と苦笑するシグルド。

「まだ居ないが、王宮に戻り次第、結婚する事にはなっている」

戻るのミレーネの呪いを解く方法が見付かってからの話にはな

幸せの、澄み切った、青い空

るが、ラケシスには伏せておいた。王家とレフィア家の間の問題でもあるし、ラケシスには関係の無い事だ。もつとも、今となっては王宮に無事に戻れるかどうか分からないが。

「そうなんだ」

ふと声を落とすラケシス。

「しかし、政略結婚というものだな。正直な所、結婚は望んではないのだが」

「よく分からないけど、それならその人と結婚しなきゃ良いのに」
そうしたいのは山々なのだが、今更後に引けないのだ、と言うと、ラケシスは更に不思議そうに首を傾げた。

それからまたしばらく歩いたところで、少し開けた場所に出た。円状の小さな庭の様なその場所には、太陽の光が差し込み、色とりどりの花が咲いていた。近くには小さな川も流れており、一休みするには丁度良い場所である。

「少し休むか」

言う前に、ラケシスは嬉々として走り出していた。地面に座りこんで、咲いている花を見つめている。

「綺麗！」

あまり花には詳しくないシグルドだったが、ラケシスの言うとおり、綺麗なものだと思った。花を摘んではしゃぐラケシスを見ながら、小川の水を腰に下げた皮袋に汲んだ。多少空腹感が有ったが、辺りを見回しても食べられる植物が見当たらなかった為、諦める事にした。

適当な樹の幹にもたれ掛かり、一つ溜息をつく。

やはりラケシスに、ソラスの元に案内して貰えるように頼んでみるか。しかし、頼んだところで聞いてくれるとは思えない。

どうしたものかと悩んでいると、花を摘んできたラケシスが、シグルドの隣に座った。

頭上に見える空は、突き抜ける様な青い空だった。しかし、シグ

ルドの心中は曇っている。

「綺麗だわ」

隣のラケシスが言った。花をたいそう気に入ったのかと思って見ると、彼女は空を見上げていた。シグルドも空に視線を戻す。

「昨日は暗くて星が輝いてたけど、今はこんなに青くて広くて、とっても綺麗」

ラケシスの瞳は、きらきらと輝いていた。彼女は今まで一体どういふ場所に住んでいたのだろうか。外の世界を見ずに、どれだけの時を生きてきたのだろうか。当たり前のように毎日空を見てきたシグルドは、青空を眺めて感動するなど、知らずのうちに忘れていた事だった。

「そうだな」

そう答えた瞬間、突然がさりと奥の茂みが揺れた。反射的に、シグルドは立ち上がった。剣に手をやった。ラケシスも驚いて、シグルドの背中にさっと隠れる。

「そう警戒しなくても、こんな所に来る人間はお前くらいだ」

茂みの奥から現れたのは、ドルチェの姿だった。

「また私を連れ戻しに来たの！」

隠れながらラケシスが叫んだ。ドルチェは溜息をつきながら「当たり前じゃないか」とこぼした。

「あんたが逃げ出したお陰で、ソラス様はお怒りだ。早く戻ってこないと、そのうちソラス様が直々に、あんたの所にやってくるよ。」

ただの人形に戻されたって、知らないんだからね」

ドルチェの言葉に、ラケシスがびくつと震えた。ただの人形に戻される、と言うことは、彼女にとっては「死」そのものなのだろう。「妹を脅すとは、感心しないな」

「私は本当の事を言ってるまでだ」

シグルドの言葉に、ドルチェはぴしゃりと鋭く切り返した。怯えたラケシスが、がたがたと震えている。

「まあ、そうは言っても、頑固者なあんたの事だ。まだ意地を張って、帰りたくないとか言いだすんだろ？」

ドルチェが右手を突き出した。また魔術を使う気か、とシグルドは彼女に向かつて走ったが、見えない壁の様なものに弾かれた。魔術で作られた、見えない壁である。そんな魔術を使う素振りそぶりは見えなかったが、流石は「ソラス」と名乗る者の魔力を貰った人形であると言うことか。

軽く飛ばされ、地面に倒れたシグルドは、起き上がれずにもがいていた。体が痺れ、言う事を聞かないのである。

「束縛の魔術をかけた。これ以上邪魔するなら、容赦しないよ」

冷たい響きのドルチェの声に、シグルドは齒軋りした。魔術の力を持っていないシグルドには、これだけの力を前にしては太刀打ち出来そうにない。さしもの「迅雷」も、魔術の前では無力に等しかった。

「さて、ラケシス。まだ帰らないと言うつもり？」

しばらくラケシスは黙っていたが、ドルチェを睨み付けながら「嫌！」と吐き捨てた。ぴくりとドルチェの片眉が上がる。その様子を見たシグルドは「乱暴な真似はよせ！」と叫ぼうとしたが、喉の奥に何かが痞つかえた様に声が出ない。

「ならば、帰りたくなるようにしてやる！」

ドルチェの手の平から、白色の光が二、三飛び出した。それらは一気にラケシスを取り囲むと、彼女の周りどぐるぐると回った。一体どういった魔法かシグルドには分からなかったが、ラケシスの顔は恐怖に歪んでいた。

「嫌っ、シグルド、助けて！」

目に涙を浮かべながら、ラケシスが懇願する。だがシグルドはただ片腕も動かせない。

その時、ラケシスを取り囲んでいた光が、突如回転を止めて、彼女に向かつて飛んだ。小さな悲鳴が上がり、ラケシスの体が淡い光で包まれた。

「ラケシス……！」

力無い声を上げるシグルドの横に、ドルチェが歩み寄ってきた。

「これである子も、帰ってこざるを得なくなるだろう。ソラスはここから西、私の向かう方にある、大木の洞うらに居る」

そう言つて、ドルチェはラケシスの姿を一瞥する事も無く、森の奥へと消えていった。

ラケシスを包んでいた光が消えた頃、ようやくシグルドは体の自由を取り戻した。立ち上がり、急いでラケシスに駆け寄る。

「大丈夫か！」

ぐったりと倒れているラケシスを抱え上げ、訊いた。ひよつとすると、動かなくなってしまう魔法でもかけられたのかと思つたが、彼女はゆっくりと目を開いた。「良かった」と安堵した瞬間、突然がばつと抱きつかれ、シグルドは驚いて固まつた。

「一体、どうしたのだ？」

泣き出すラケシス。ドルチェにかけられた魔法は、一体何だったのか。そこまで強力なものなのだろうか。

「私、私、魔術が使えなくなっちゃったよお！」

訊けば、先ほどドルチェがかけた魔術は、相手の魔術の力を封じてしまうものらしい。そんな事だと思つたが、ラケシスにとって魔術とは、自分の手足の様な物だったのだろう。魔術を持たないシグルドには分からないが、当たり前のように使ってきたものが突然封じられる恐怖が、ラケシスには有つたのだろう。

シグルドは泣き付く少女の背中をさすりながら、傍らに落ちていた、彼女が摘んだ花束を見た。それは魔術の影響か、元気を無くして萎しおれ始めていた。

第八章「恐怖」

「嫌、離してよ！」

夜の気配が近付いてきた森の中に、小さな溜息と大きな声が響く。言うまでもなく、シグルドとラケシスだった。

魔術を封じられたラケシスだったが、今だにソラスの元に帰るのを嫌がっていた。泣いていたラケシスを見て「可哀想だが、これで大人しく帰る気になるだろう」と思ったシグルドだったが、それでも頑なに嫌だと言い張る彼女を見て面食らった。

今はこうしてラケシスの手を引いて、無理矢理にドルチェが去った方向、ソラスの元へと向かっているのだが、暴れるは大声は出さずわでシグルドは胃が痛くなる思いだった。

「魔術の力が戻らなければ、お前も困るだろう」

シグルドは優しく諭す様に、泣き喚くラケシスに言った。それは魔術を封じられた本人が良く分かっている事なのだろうが、やはり帰りたくないの一点張りである。なかなか頑固な娘だ。

「ラケシスを作ったソラスも、どうせならもう少し手のかからない性格に作れば良かったものを」

心の中でそんな事を思っていると、ラケシスから手を噛み疲れた。小さな痛みが走ったが、我慢した。

「痛いわよ、離してよ！ 逃げたりなんかしないから！」

噛みついてても無視されたラケシスが、顔を真っ赤にしながら、手をぶんぶん振りながら言った。知らずのうちに力が入ってしまったらしい。ぱっと手を離すと、掴んでいた彼女の手首が赤くなっていた。

「すまない」

素直に謝るシグルドだったが、次の瞬間平手が飛んできた。小気味良い音が響いた。

「馬鹿っ！」

幸せの、澄み切った、青い空

それだけ言つて、ラケシスはついつとそっぽを向いてしまった。相当ご立腹の様子である。ドルチェの仕業でも有るとはいえ、こうして半ば強引にソラスの場所に送り届けようとしているのだから、彼女の怒りも当然だろう。

しかし、やはりシグルドとしては、ラケシスに親元に帰つて欲しいと思う。たとえ無理矢理でも、騎士として、王族として、このアグリア王国に住む者を危険な目に遭わせたくはない。ソラスに人形に戻されるのも、また昨晚の暴漢などに襲われるのも、彼女にとつて不幸な事にしかないのだから。

言葉を交わす事もなく歩く二人に、いつしか暗い夜の影が落ちてきていた。

夜が来る前に小屋を発見できたのは、まさに幸運と言えた。

以前この辺りに住んでいた者が作つた小屋なのだろうか、埃まみれの汚いあばら家だったが、野宿するよりは幾分ましである。扉はかるうじて蝶番ちょうばんでつながっている程度で風は吹きさらしだし、床には風が運んできたのであろう枯葉や小枝が散らばっていた。

入つてすぐの部屋は、先の状態に加えて床板がめくれ上がつていたり、とても使える状態ではなかったが、奥の部屋はそれほど破損もなく、暖炉まであった。

非常食のような物は置いてあるだろうかと期待してシグルドは辺りを見たが、それらしき物は無かった。思えば昨晚、ラケシスを助けた時から丸一日、何も食べていない。空腹のため、腹がきゅうと小さく鳴いた。

「とりあえず火をおこすか」

辺りに散らばっている小枝をかき集め、暖炉に放り込むと、その横にあつた火打石を使って火を点けた。昨日と違って毛布も無い為、自分はともかくラケシスには堪えるだろうと思つての配慮である。

「私が魔術を使えたら、暖炉に火を点けるくらい、簡単な事なのに」
暖炉の火を見つめながら、ラケシスが力無く呟いた。彼女のシヨ

ツクを知らないシグルドは、どう声をかけて良いものか分からず、そつと彼女の頭を撫でてやった。

「魔術の力が無いだけで、こんなに不安になるなんて、今まで考えた事もなかった」

そう言つて、ラケシスはうつむいてしまった。小さく肩が震え、嗚咽が部屋に響く。

「流石にこのままでは居られまい。姉の言つとおり、一度ソラスの元に帰った方が良いだろう」

「でも、嫌なのよ……またずっと、樹の洞の中で生活しなきゃいけない。もう二度と、外の世界なんて見れなくなるに決まつてる。夜空の星も、綺麗な花も、青い空も、もう見れなくなっちゃう」

王子とは言え窮屈な生活を強いられていないシグルドは、彼女の欲しているものを当たり前前の様に持っている。それを思うと、何だか心が痛くなった。

しばらくラケシスに寄り添っていたシグルドだったが、「今はそつとしておいてやろう」と思い、立ち上がった。

「少し辺りを見てくる。食料を探してくる」

そのままシグルドは、嗚咽を漏らすラケシスを見ないように小屋を出た。

夜の森を歩きながら、シグルドは途方に暮れていた。

ミレーネの呪いを解く方法を探すために森に入り、ようやく手掛かりを掴んだかと思いきや、それが子供ののように手のかかる人形だった。更にその人形は、今やただの「大きな子供」と化している。

それに、泣いているラケシスに対し、どう接して良いものかも分からない。父や兄が見れば「情けない」と一笑されそうだが、騎士団の男連中とばかり付き合ってきたシグルドには、女性の扱いがまるで分からなかった。

全く、父上に嵌められて、とんだ災難を被ったものだ。そう思つてシグルドは自嘲気味に笑った。

しかし、泣いているラケシスを見てみると、どうにも目を離せない。どうしても、構ってやりたくなくなる。

「そろそろ落ち着いただろうか」

食べれる植物を見つけて袋に詰めていたシグルドは、採取を切り上げて小屋へと戻ろうとした。

ふとその時、甲高い悲鳴が夜の静寂を切り裂いた。小屋のある方向からだった。

「ラケシスの身に、何か有ったのか!」

すぐさまシグルドは駆け出した。

ドルチェはソラスの元で待っていると聞いた。しかし「冥土の入り口」まで足を踏み入れる人間はそうそう居ないだろう。では一体何が、と考え、不安に駆られた。

「大丈夫か!」

外れかけの扉を乱暴に放り投げ、シグルドは小屋に入った。瞬間、驚いて目を丸くした。

「助けて!」

ラケシスが、何やら白く細い手の様なものに、宙吊りにされているではないか。床や天井、壁から無数に伸びるそれは、彼女の体にぐるぐると巻き付いて離れようとしなない。暖炉の火は消えかけていたが、その姿は暗い中でもはっきりと見る事ができた。

「以前ここに住んでいた者の慣れの果てか」

幽霊やら妖やらの類は、シグルドにとっては専門外の相手である。しかしラケシスが魔術を使えない以上、シグルドの力で何とかするしかない。腰の剣を抜き、構えた。

人形だ。

女の人形だ。

体をよこせ。

「聴くな、ラケシス!」

少女にまわり付く紙の様に薄っぺらな手を斬りながら、シグル

ドは叫んだ。こういったものは、恐れや同情など、心に付け入る隙を見せれば、より簡単に体の中に滑りこんでくる。しかし平常心を保つと言うのは、今のラケシスには酷な事ではあった。

幾ら斬っても、次から次にわらわらと沸いて出る白い手に、シグルドは舌打ちした。ラケシスは泣きながらシグルドを見ている。

ぎりつと奥歯を噛み、シグルドは賭けに出た。暖炉の中に残っていた、まだ火が消えきっていない木片を掻き出して、それを床の上にぶち撒けたのだ。

たちまち火は床に燃え移り、大きな炎となって壁や天井を舐めた。途端に、辺りから苦しげな声上がる。

「くあアアあ！」

「熱い、あつい、アツイ！」

「嫌だ、いやだ、イヤダ！」

炎に合わせるようにゆらゆらと蠢く蠢白い手が、ラケシスの束縛を解いた。床に落ちそうになったところでシグルドは彼女を受け止めると、勢いを付けて炎の壁に体当たりした。元々脆くなっていたせいか、あっさりと壁は破れ、シグルドたちは勢いよく地面に転がった。

「今のうちに、少し離れよう。動けるか？」

「駄目、動けない」

「大丈夫だ」

恐怖で腰が抜けたのか、立ち上がれずに弱々しく言うラケシスを、シグルドは抱え上げた。炎上する小屋からは、まだ怨霊の声が微妙に聞こえてきていたが、気に止めないようにしながらシグルドは走り出した。

小屋から離れたところで、シグルドは「ふう」と一息ついてラケシスを降ろした。折角小屋を発見したと言うのに、結局野宿である。「あいつら、一体何だったの？」

訊いてくるラケシスの歯がガチガチと鳴っていた。恐怖と涙で、

顔がくしゃくしゃになっている。

「恐らくは、元あの小屋に住んでいた者の死後の姿だろう」

一体どのような未練があつてあの場所に留まっているかは、流石に予想がつかなかった。しかし、シグルドたちが最初に最後の来訪者であれば良いのだが。

そんな事を考えていると、突然ラケシスがシグルドに飛びつき、顔を埋めてきた。一瞬固まりそうになったシグルドだったが、何とか耐え忍んだ。

「帰る！ ソラスの所に帰る！ もう怖いのは沢山だわ！」

泣きながら顔をぐしぐしと擦りつけてくるラケシスを見て、シグルドは優しく笑いかけた。魔術が無ければ彼女は、普通の人間の少女と、何ら変わりはなかった。

第九章「大樹」

夜が明けて、シグルドは昨晚採った野草で空腹を満たし、ソラスの居る大樹の洞を目指した。

ラケシスの足取りは重いが、今までよりも断然早かった。すぐに休憩を取りたがる点を除いては、順調に目的地へと進んでいる。とは言え、馬の様に強靱な脚力を持つシグルドと比べれば、誰でも「すぐに休憩を取りたがる」事になるのだが。

「よほど早く、魔術の力を取り戻したいのだろうな」

シグルドはそう思った。よほど昨晚の事が怖かったのだろう。確かに魔術を持たないシグルドも、幽霊だの妖だのというものは遠慮したいし正直恐怖を感じはするが、子供の精神のまま育ってしまったようなラケシスには、かなりのシヨックだったに違いない。

「シグルド、ちょっと、待ってよう」

真昼時になって、後方から疲れた声が上がリ、ずんずんと進むシグルドを呼びとめた。

「まだ休憩を取ってから、さほど歩いていないぞ」

振り返り、ラケシスを見やる。彼女は樹に背もたれて、そのままずるずると地面に座りこんでしまった。「人形でも疲れを感じるのか」と今更ながら思う。こういう所はやけに人間くさい辺り、ソラストはよほどの凝り性なのだろうか。それとも、他に何か目的があってこの様に作っているのか。

「そんな事言われても、疲れたものは疲れたの！ 大体シグルド、本当に人間なの？ 一日中歩きっぱなしでもビクともしなさそうじゃない」

実際に一日中歩き通しても大丈夫なのだが、それが当然と思っっているシグルドにしてみれば、彼女の非難は首を傾げるものだった。流石にこれは、シグルドが常人と比べて多少 いや、かなりずれ

ていると言わざるを得ない。彼の頑丈ぶりは折り紙付きだった。

「これしきで根を上げていては、騎士団長は勤まらないからな」

平然とそう返されて、ラケシスはうな垂れた。ラケシスは確かに人形ではあるが、体力的にはただの少女であると言うのに、騎士と比べられてはたまらない。

「私は騎士でも何でももないの！ ただの女の子じゃない！」

「それだけ騒ぐ元気が有るならば大丈夫だ。さあ、早く立て」

ラケシスの言葉を聞いているのか、シグルドはしれっと切り返した。ラケシスの非難がましい翡翠の双眸が彼を睨んでいたが、無駄と諦めたのか、ふらふらと立ち上がった。

それからしばらくは大人しかったが、やはり数分も経たないうちに、ラケシスは再び地面に座りこんだ。シグルドは再び彼女を叱咤激励したが、猛抗議されて結局シグルドが折れる結果となった。

「魔術の力なんて無くても、充分化け物並みだわ」

ラケシスに睨まれながらそう言われ、シグルドは苦虫を噛み潰したような顔になった。

長めの休息の後、シグルドは再び歩き出した。一刻も早くアグリアに戻り、ミレーネを救わなければならぬ。その手掛かりが、もう目と鼻の先に有る事で、シグルドの足取りは早くなっていた。

「ねえシグルド」

シグルドに背負われたラケシスが、急に話しかけてきた。長めの休憩を取っても「もう足が痛くて動かない」と不平を言つて駄々をこねた為、背負って移動する事にしたのだ。シグルドは視線を前方に向けたまま、聴覚だけ背中に向けた。

「もし私と離れ離れになっても、私がソラスの所に戻って、二度と外に出られなくなっても、私の事を覚えていてくれる？」

昨日と同じく、突拍子もない事を訊いてくる。出会った時は気丈にシグルドを罵り倒していたが、随分しおらしくなったものだと思いつつ、「ああ」と短く答えた。

「本当に？」

「ああ」

「絶対に？」

「ああ」

「本当に絶対に？」

「本当に絶対に、だ」

答え方に不満だったのか、ラケシスはしつこく訊いてきたが、シグルドは面倒とは感じなかった。普段のシグルドならば「しつこいぞ」とばっさり切り捨てる所だが、自分でも不思議だった。

「約束だからね」

「ああ、アグリア王国第二王子の名にかけて、約束しよう」

答えた瞬間、背中への気配が柔らかくなった。恐らく笑っているのだろうなと思った。彼女と出会って、まだ大して時間は経っていないのだが、随分と懐かれてしまったようだ。子供相手には憎まれ役になる事の方が多かったシグルドにとっては、珍しい出来事だった。いつの間にか、背中から寝息が聞こえてきていた。まだ昼時だというのに、随分と早い眠りだ。よほど歩き疲れていたのだろう。

感情を持ち、体温も有って、眠りまでとる。疲れを知って、足の痛みまで訴えたこの少女は、どう見ても人間にしか見えなかった。ちらりと背中を見やると、彼女は安心しきった表情で、安らかに寝息を立てている。

そのあどけない寝顔に思わず破顔しつつ、シグルドは歩みを進めた。

それから三度の夜を明けた夕暮れ時、ようやくシグルドは目的の大樹まで辿り着いた。シグルド一人ならば一日で踏破できる距離だったが、やはりラケシスが途中で根を上げた為に、到着が遅れてしまったのである。

「見事なものだな」

その樹は、辺りの樹を押し退ける様に、雄々しく大地に根を伸ば

していた。幹にはびっしりと苔が生えており、かなりの年月を生き
てきた事を物語っている。またその太さは圧倒的で、一周するにも
かなりの時間を要するだろう。上を見上げても、どれほど高い場所
までその身を伸ばしているのか分からない。まるで神話に登場する、
世界樹そのものだ。

流石にこの辺りまで来た人間は、シグルドを除けば皆無だろう。
そこは秘境と呼ぶに相応しく、視界に映る全てが緑で覆われていた。
シグルドはしばらくその光景に見とれていたが、ラケシスは目を
伏せていた。家出した子供を親元に引き渡す時、決まってラケシス
と同じ表情をしたものだが、今回ばかりは流石のシグルドも同情し
た。

「ようやく来たみたいだね」

頭上から声をかけられ、シグルドは声の主を見上げた。太い枝の
上に、いかにも待ち侘びたといった表情のドルチェが立っており、
こちらを見下ろしていた。

「入り口はこちらだ。登って来い」

相変わらずの冷たい声でそれだけ言うと、ドルチェはひよいと枝
の向こう側に消えてしまった。流石に木登りを強要するわけにもい
かず、シグルドは無言でラケシスを背負うと、苔のついた樹の幹を
登り始めた。

第十章「伝説」

「ここだ、入れ」

ドルチェにぶつきらぼうに言われ、シグルドは眉をひそめた。確かに彼女の指差す場所には大きな洞がぽっかりと口を開けていたが、深さはせいぜい大人一人が収まるかどうか、といった所である。

「こんな所に、本当にソラスは居るのか？」

「信用出来ないのも無理は無いかも知れないが、入ってみれば分かることさ」

言われて、シグルドは洞に飛び込んだ。

その瞬間、視界に霞かすみがかかり、世界がぐにやりと歪んだような気がした。夢に入る直前を体感している様な、妙な感覚に襲われる。

ぼやけた視界が元に戻った時、シグルドは思わず目を見開いた。

今回の旅は、始まる前から驚きの連続だったが、これは特に群を抜いている。

シグルドの眼前には、美しい湖が広がっていたのである。水晶の様にきらきらと輝く湖面は、宝石を散りばめた様に美しかった。しかし天井を見上げてみると、赤、青、緑、黄色と様々な色が混ざり合った雲が広がっている。美しい湖と奇妙な曇天は決して混ざらず、例えて言うなら「全く別の世界が、無理矢理くっつけられた」様な感覚だった。

「ソラスが作り出した世界。ここはソラスの結界の中さ」

シグルドの心中を察した様に、ドルチェが言った。これだけの空間を作り出せるとは、ソラスとは本当に「伝説の魔術師ソラス・ナクル」なのではないかと、シグルドは思った。

「この世界の中なら、ソラスは何でも出来る。言わば神と同じさ。せいぜい怒らせない様、気を付けるのだな」

ここまで言っただルチェは言葉を切り、思い出したように「ここで」と切り出した。

「いつまでそいつにくっ付いてるつもりだい、ラケシス。子供じやあるまいし」

ラケシスは、シグルドの背にくっついたままだった。「もう降りても大丈夫だぞ」とシグルドが言っても、嫌嫌と頭を振って降りようとしない。これからソラスに受ける仕打ちが怖いのか、それとも何か他にあるのか、シグルドには分からなかった。

「まあ良い、さっさと行くよ」

ドルチエが「ふん」と鼻を鳴らし、すたすたと歩き出した。ラケシスが降りてくれないので、仕方なく背負ったままでシグルドも歩き出した。今まで何も無かった湖のほとりに、いつのまにか一軒の家が現れていた。

扉の前まで来て、ドルチエは「連れ戻したよ」と一言言うと、そのまま屋内へと入っていった。そこから発する異様なまでの威圧感に気圧されそうになったが、シグルドもそれに続いて一歩踏み出す。「失礼する」

やはり魔術師の家となると、魔術の本やら怪しい薬瓶が立ち並ぶ棚やら、魔法陣やらが有るのかと思っていたシグルドだったが、その殺風景さに、自分でもよく分からない表情になった。

有るのは、机と長椅子、そして一人の男が腰掛けている揺り椅子だけだった。思い描いていたものとは全く違う。ミレーネの眠っていた部屋の様な有様である。

「よくいらした」

抑揚の無い声と共に、ぎしぎしと揺り椅子が動いた。若い男の声だった。その声を聞いたラケシスが、びくつと肩を震わせて、シグルドの背から降りた。

ソラスはシグルドに背を向けたままだ。鍰広の帽子だけが椅子の背もたれから飛び出て見えているだけで、その容姿は全く分からない。

「アグリア王国第二王子シグルド殿、この度はラケシスを救い、届

けてくれて感謝する」

「騎士として、王族としての義務を果たしたまでです」

シグルドは軽く一礼したが、ソラスはやはり不動のままだった。空気が重い。誰が喋る事も無く、静寂が辺りを包んだ。

このままではいかんと、シグルドが話を切り出そうと口を開いた時、ぎしりと再び揺り椅子が鳴った。

「貴殿の質問にお答えしようか、シグルド殿。ついでに、貴殿の頼みとやらについても」

まだ何も言っていないのに、ソラスは唐突にそう話した。しかし、ソラスに訊きたい事が有ったのは事実だし、ミレーネの事も相談してみるつもりだった。まるで今までの出来事を全て知っているかの様な口ぶりに、シグルドは驚きを隠せなかった。

「まず、私は紛れも無く、伝説の魔術師と呼ばれるソラス・ナクル本人だ」

そんな馬鹿な、と思ったが、心の何処かで納得している事に、シグルドは気が付いていただろうか。

伝説となっている大魔術師が、今自分の目の前に居て、自分と話をしている。本来ならば喜ぶ事かも知れないが、得体の知れない恐怖をシグルドは感じていた。

「しかし、ソラス・ナクルの伝説は、既に一千年も語り継がれているのですよ？」

「私はこの結界の中で、時を忘れて生きている。千年の時など、私にとっては関係の無い事だ」

シグルドが言いきるより早く、ソラスが答えた。伝説の大魔術師相手ともなれば、喋る事も不要になるのだろうか。ドルチエが先ほど「この結界の中なら、ソラスは神と同じ」と言っていたが、まさにその通りだなと思った。

「次に、彼女たちの事だが」

言いつつ、ソラスはゆっくりとこちらに向き直った。その姿を見たシグルドは、思わず一步退いてしまった。自分の描いていた夢を

壊された様な、そんな気がしたのだ。

「流石に驚いている様だな」

含むように笑うその顔は、人間のものとは全く違っていた。ソラスの顔は、狼そのものだったのである。よくよく見てみれば、更に三本の尻尾を優雅になびかせているではないか。妖、異形と呼ばれ、忌み嫌われる者たちと何ら変わりのない姿である。

「伝説の魔術師が異形の者と知り、驚いたかね。それとも、失望したかね。あるいはその両方かな？」

口をぱくぱくとさせているシグルドを見ながら、自嘲気味に訊いてくるソラスは、怪しい含み笑いを消さないままだった。青年の様な声が、その顔と不釣り合いで奇妙に思えた。

しかし、彼女ら姉妹とソラスの姿に、一体何の関係が有るのだろうか。シグルドは面持ちを正すと、退いた一步を元に戻し、ソラスの銀の瞳を真っ直ぐに見つめた。

第十一章「渴望」

怪しげな笑みを浮かべつつ、しかしどこか憂いを帯びた表情で、ソラスはゆっくりと語りだした。

「現代に語り継がれている伝説、それらの殆どは、全て事実、私が今まで行ってきた事だ」

当然、有りもしない事も、勝手に私の所業にされている話もあるがね、とソラスは付け加えた。

「しかし、どの世界に語り継がれる話にも、私がこんな姿をしているとは書かれていない。実際、貴殿が読み聞かされた話もそうだったろう？」

シグルドは重く頷いた。それは、ソラスと面を合わせた時の反応からも分かる。「伝説の魔術師が、実は妖の類だった」などは、今まで聞いた事も無い。

「私は、人々の為に様々な事を行ってきた。荒野を野原に変え、粗悪な帝国を滅ぼし、邪竜を打ち倒した」

ソラスの目が、すっと細くなった。彼を包む哀愁が、一層深くなった気がした。

「しかし、この異形の姿ゆえ、人々は私を蔑み、恐れた」

どれだけ人を喜ばせる事を行っても、最終的に彼の姿を知った者は、例外無く彼に石を投げた。異形の姿でこの世に生まれ、人の心を持って育ったソラスは、どうしても周りの人間に認めてもらいにくかったのだ。彼の心の叫びは悲痛に満ちていた。

とうとう疲れ切った彼は、人々から、世界の全てから離れ、この結界を作って身を潜めた。どうすれば良いのか分からず、苦悩する日々が続いた。

「随分と長い間、悩んでいた。ずっと自虐を繰り返す日々だったよ」
今でもそうかも知れないがね、とか細く呟いたその声は、誰の耳にも止まる事は無かった。

幸せの、澄み切った、青い空

いつしか伝説となり、人々の間に「ソラス・ナクルの伝説」が御伽噺として語られるようになった時、その話を本で読んだソラスは、自嘲の笑みを浮かべるしかなかった。さも「人間の姿」をした魔術師が、様々な伝説を作り上げたとされていた。人間が語り継ぐには不要な部分を取り除かれ、書き換えられている事に憤りを感じ、また絶望した。

ならば、人間と同じ姿になってやろう。人間に希望を捨てきれなかった彼は、人々に愛されなかった男は、人間そっくりな人形を作り出した。彼の持つ魔力を駆使すれば、それは造作も無い事だった。同時に、魂を人形に移す術も完成させた。

人間そっくりの人形に、自分の魂を移そうとしたのである。

しかし納得の行く人形が作り出せぬまま、再び長い年月が過ぎた。自分は一体どんな姿をしたいのか、どうすれば人々は自分自身に目を向けてくれるのか、分からなくなっていたのである。

「思えば、私は一人でいる事の寂しさを、少しでも和らげようとしていたのだろうか」

そんな折に完成したのが、ラケシスとドルチェの二体の人形だった。ソラスは二人に魔力を注ぎ、心を与え、人間と同じように育ててきた。友人と娘がいつぺんに出来た様な感覚に、ソラスは心から喜んだ。

しかし彼女たちは、ソラスから色々な事を学ぶうち、外の世界を渴望するようになっていった。彼女たちを外に出して、もし人間に捕まった時の事を考えると、ソラスはそれを許すことが出来なかった。また魔術の力を持つ可愛い娘を、悪用されたり乱暴に扱われる事を恐れたのだ。

「ドルチェは聞き分けの良い子だったが、ラケシスはどうも我俣に育ってしまったね」

親である私の言う事すら、なかなか聞いてくれなかった、とソラスは苦笑した。シグルドが思わず重く頷くと、ソラスの傍らに立つラケシスからぎろりと睨まれた。

「しかし私も、随分と悩んだのだよ。千年という長い長い月日の間、私には悩むことしか出来なかった」

シグルドは、それほどまでに「人間になりたい」と望んだ大魔術師が、ひどく小さい姿であるように思えた。数多くの偉業を成し遂げたとは言え、心は硝子細工がらすの様に繊細で、脆い。伝説の人物であるとは言え、姿は違えど、心は人のそれと何ら変わりはなかった。

話は途切れ、再び静寂が辺りを包んだ。しかしソラスは顔を上げ、また含むような笑顔を作った。ひよつとすると、これが彼なりの、精一杯の笑顔なのかも知れない。

「ラケシスが消えた日、私は焦っていた。もし彼女が心無い者に捕まっていたら、とね。親心というものだろう」

ラケシスがソラスの言葉を聴いて、驚いたように目を丸くした。と、次の瞬間には照れたような表情でうつむいた。「子の事を心配しない親は居ない」とシグルドは言ったが、やはりラケシスの場合も例外ではなかったようだ。

ソラスが椅子を回し、ラケシスの方に向き直った。暖かくその頭を撫でる姿は、まさに親子そのものだった。

「我が身の事も勿論考えた。もしお前を利用して、この場所に来る輩が居たら、また私は化け物と罵られるだろう、と。……しかし、そんな事よりも、やはりお前が心配でならなかったよ」

言われてラケシスは泣き出した。何故これほどまでに暖かい男を嫌っていたのかとシグルドは不思議に思ったが、誰しも親に反抗したい時期が来るだろう、と思うと、妙に納得できた。ラケシスの性格を、この数日の間に理解したからだろうか。

「私が迎えに行こうかとも思ったが、私の身を案じてくれたドルチエが、代わりに迎えに行くと聞かなくてな。脅されたり術を封じられたりと災難だったろうが、ドルチエはお前の事を、自分なりに思いやっていたのだぞ」

そう言われて、ドルチエがつんとそっぽを向いた。頬が若干朱に

染まっている。照れているのだろう。

ぎしり、と音をたてて、椅子が再びシグルドの方を向いた。ソラスとラケシス、ドルチェのやりとりに、思わず顔をほころばせていたシグルドが、面持ちをびしりと正す。

「ラケシスが貴殿の様な男と出会えて、本当に良かったと思っています。もし貴殿がここに来るなれば、私は喜んで力を貸そうと決めていた」

「では、ミレーネ殿の件は！」

シグルドの顔が喜びに輝いたのを見て、ソラスが「うむ」と頷いた。何故かラケシスは頬を膨らませて、むくれていた。

「人里に出るのは久しぶりだ。正直な所、怖くもある。しかし、シグルド殿、貴殿の為に力は惜しまぬと決めた。何しろ、可愛い娘を救ってくれた恩人だ」

ソラスがすつと立ち上がった。何処から取り出したのか、いつの間にか彼の手には祭儀用の杖が握られていた。

「善は急げ、という言葉もある。行こう」

静かに言ったソラスに、シグルドは深く礼をした。

第十二章「解呪」

アグリア宮殿内は、突如混乱と喧騒に包まれた。

悲鳴を上げながら逃げ回る女官や召使い、剣や槍を構える警備兵や騎士たち。

その原因は、突然大広間に現れたシグルドたち、厳密に言えばソラスの姿だった。

「王宮に化け物が現れるなんて！」

「助けてくれ、殺される！」

「化け物め、何処から宮殿に入った！」

「我らアグリア七騎士団が成敗してくれる！」

突然の騒動にラケシスは驚いてシグルドの背中に隠れ、ドルチエは鼻を鳴らし、ソラスは「まあ予想の範囲内ではあったが」と呟いて視線を落とした。

最も驚いていたのは、シグルドだった。「行こう」とソラスに言われ、手を掴まれた瞬間、結界に入った時と同じく視界が霞み、気付いた時には王宮の中に居たのだから。一度結界内部に入った時に経験しているが、一瞬のうちに王宮に戻れた事に再び目を剥いたのだ。

しかしすぐに冷静さを取り戻し、大きく息を吸い込んで、

「静まれ！ 静まれ！ アグリア王国第二王子、シグルドは、今この時帰還した！」

シグルドの怒声に、大騒ぎだった広間はしんと静まり返った。混乱してソラスやシグルドに武器を向けていた兵士たちも、慌てて武器を引っ込めた。騎士も逃げ出すほどのシグルドの怒声は、騒動を納めるには効果覲面こうかてきめんだった。

その様子を見ていたラケシスは驚いて目をぱちくりさせ、ドルチエは迷惑そうに耳を塞ぎ、ソラスは感心したように静かに笑っていた。

「お帰りなさいませ、お兄様」

ふと背後から声をかけられ、シグルドは振り向いた。ファーニヤの顔を見るのが、随分と久しぶりな事に思える。

「今帰った」

妹の顔を見た嬉しさに、顔の筋肉が緩みそうになる。

「そろそろご帰還される頃だと、占いに出ておりました。兄上なら、きっとミレーネ様の呪いを解く方法を探し当て、無事に帰ってくると思っておりますわ」

ファーニヤがそう言って、にこりと優雅に笑ってみせた。しかしその表情は、少しやつれて見える。恐らくはミレーネの看護と、呪いを抑えるための魔術の酷使で、疲れが出ているのだろう。

「所で、そちらの方は？」

ソラスの狼面を見ても動じず、ファーニヤが訊いてきた。ソラスの魔力を感じ取り、その力の強さを感じ取ったのだろう。

「お初にお目にかかります、姫君。私はソラス・ナクルと申す魔術師。こちらの二人は私の娘、ドルチェとラケシスと申します」

シグルドが答えるより早く、ソラスが深々と頭を下げながら言った。ソラス・ナクルの名に少しファーニヤの瞳が驚きを示したが、それはすぐに消えた。魔術が使える者同士だと、色々と詮索しなくても分かるものだろうか。

「ご丁寧に、有難うございます。私はファーニヤ・フォイム・アグリア。ミレーネ様の事、よろしくお願い致します」

ファーニヤもソラスに深々と礼をした。

「所で、父上と兄上は？」

挨拶が済んだところで、シグルドはファーニヤに訊いた。父と兄にもシグルドの帰還を伝えたファーニヤだったが、まさか大広間に現れるとは予想していなかったのだろう。門の前でシグルドの帰還を心待ちにしている所だと、妹はフツツと笑いながら答えた。

「父上と兄上には、ミレーネ殿の呪いを解いた後、詳しく説明すると伝えておいてくれ。本来なら俺が向かわねばならん所だが、一刻

も早くミレーネ殿を助けたいのでな」

言われてファーニャは小さく頷き、正門へと向かって歩いていった。シグルドたちも、ミレーネの部屋に向かって歩き出す。

今だに動けずに固まっている配下の者たちに「いつまで固まっているつもりだ！ 早く持ち場に戻れ！」と一喝すると、大広間で硬直していた者たちは一斉に動き出し、慌しく持ち場へ戻っていった。

ミレーネの部屋に案内され、中に入った瞬間、ソラスが「ふむ」と小さく唸った。

その呪いの力を感じてか、ラケシスは不安そうに眉根を寄せて震え、ドルチェも心なしに青ざめている様に見えた。

相変わらず殺風景な部屋に、異様な空気が充満していた。重い。呪いの力が増幅したのか、それともシグルドが胸に潜める一抹の不安のせいかわからない。どちらかなのかは分からない。

「どうでしょうか、ソラス殿」
「呪いを引き剥がすのは造作もない。が、この娘の親が、相当悪い真似をしてきた様だな」

流石の大魔術師も思わず渋面になるほど、この呪いは厄介な代物らしい。しかしファーニャでも治すに至らない程の呪いを引き剥がす事が「造作もない」とは、やはり大魔術師の名は伊達ではない。「どうするのです？」

シグルドが、ミレーネの顔を覗きこみながら訊いた。その顔は以前見た時よりも弱々しくなっている様に感じた。呪いに心身を食い破られる憐れな少女を、一刻も早く救い出したかった。

「私が、その娘に憑いている呪いを引き剥がし、具現化する」
言うのが早いかわ、ソラスは杖を高く掲げ、精神を集中させた。見開かれた銀の瞳が、ぎらぎらと輝いた。地鳴りの様な音が部屋に響き渡り、ソラスの持つ杖の先端に付けられた水晶が透明な水色の輝きを放つ。

シグルドがミレーネの隣から立ち退いた瞬間、水晶の光は大きさ

を増し、ミレーネに向かって伸びた。光はあっという間にミレーネの体を包みこみ、ほっそりと弱った少女の体を宙に持ち上げた。「ウウウ……」

人間のものとは違う、まるで野獣の様な声が、ミレーネの口から漏れた。途端にその体全体から黒いもやの様なものが現れ、少女の上で大きな球体となって固まった。

「これが呪いの本体か！」

シグルドが腰の剣を抜き、低く構えた。黒い球体を鋭く睨みつける。あれが、まだ一八歳の少女を苦しめている呪いの姿か。

「シグルド殿、その剣で呪いを断ち切るのです！」

ソラスに言われるよりも早く、シグルドは深く身を沈め、大きく跳躍していた。

ミレーネの体から吐き出された黒い球体を、「はっ！」という気合の声と共に、シグルドは一閃の元に斬り裂いた。手ごたえはまるで無かったが、横に真っ二つに切断されたそれは、地響きの様な怨念の声を上げながら、霧散して消え失せた。

途端に体を包んでいた光が消えたミレーネは、ゆっくりと寝台へと降りてきた。その寝顔は血の色を取り戻し、少し安らいでいる様に見えた。

第十三章「対話」

ミレーネの呪いをシグルドが断ち切った翌日の午後、王室には七つの姿が有った。これだけの人数が王室に揃うのは、久々の事だった。

国王レイディルを前に、ドノヴァン、シグルド、ファーニヤの兄妹と、大魔術師ソラス・ナクル。そしてその娘ドルチェとラケシスが並んでいた。

「シグルド、この度の働き、大儀であった。そして、大魔術師ソラス・ナクル殿、ご助力心から感謝致します」

国王であるレイディルがソラスに向かって頭を垂れ、ソラスは慌てたように首を振った。三本の尻尾が狼狽する様に蠢うごめいている。

「私はシグルド殿に感謝しております。なにしろ、娘を救ってくれた恩人なのでから」

どうか面を上げてください、とソラスが言った所で、レイディルは顔を上げた。一国の王が頭を下げるなど、有ってはならない事とソラスは続けた。

大魔術師と言われた彼だが、礼節を重んじ、決して傲慢さを見せない。宮殿にやってきた偽者のソラス・ナクルたちとは対照的で、逆に彼の器の大きさが見て量れた。

ミレーネの呪いを解いた後、初めてソラスの姿を見た時は、レイディルもドノヴァンも、いつもの冷静さを失って驚き呆けていた。しかしシグルドからの報告を聞き、伝説の魔術師と分かってからは、特に彼の姿を気にする様子は見せなくなった。

「ミレーネ殿はどうしておられる？」

レイディルがファーニヤに視線を移した。ファーニヤはにっこりと微笑むと、

「ミレーネ様は、順調に回復なさっておりますわ。あと三日もすれば、寝台から降りる事も出来るでしょう」

言い終わって、ファーニヤは一瞬暗く目を伏せた。次の瞬間には元の明るい顔に戻っていたが、その様子を見ていたシグルドは、何事か有ったのだろうかと怪訝そうに眉をひそめた。

しかし、ミレーネの体調が快癒の方向に向かっていると聴き、シグルドは胸を撫で下ろした。

ふとラケシスの姿を見やると、何かに不満そうにうつむいていた昨日ミレーネを助けた時からそうだったのだが、話しかけようとしても無言で逃げられてしまい、何も分からずにいたのだ。「何か怒らせる様な事をした覚えはないんだが」と彼女を見ていると、不意に目が合ってしまった。

一体どうしたのだ、と目で訊いたが、ぷいっと視線を外され、無視された。思わず渋面になる。

「ところでシグルド」

父王に呼ばれ、面持ちを正す。ラケシスの事は気になるが、後で話を聴いてみようと思ひ、意識をレイディルに向けた。

「ミレーネ殿とは、もう話はしたのかね？」

「いえ、まだですが」

まだお休み頂いていたほうが良いと思ひまして、と付け加えたが、レイディルは不満そうに顔を歪めた。ドノヴァンが、その様子を見て影でクスツと笑ったのを、シグルドは見逃さなかった。

しばらくのやり取りの後、シグルドは部屋の外に追い出された。

レイディルとドノヴァンが、ソラスと話がしたいと言ひ出し、下がれとシグルドだけに命じたのである。

一体何の話をしているのか分からないが、策略家の父と兄の事である。どうせソラスをこの宮殿に留まらせる為の口実でも並べているのだろう、と察した。ついでに言えば、恐らくこのままミレーネの所へ行けという配慮も有るだろう。

思い通りに動くのは癪だったが、シグルドもミレーネの様子が気になってきた為、彼女が居る部屋へと向かった。

一番最初にミレーネに会うと決め、部屋の前に来た時のように、シグルドは固まっていた。あの時はファーニヤが中に居たため、多
少気が楽だったが、今度はシグルド一人だ。巧く話せるだろうか
緊張しつつも、覚悟を決めてノックをする。

中から「どうぞ」と、まるで琴の音色のように澄んだ声が返り、
シグルドは扉を開けた。

「失礼します、ミレーネ殿」

「シグルド様……」

シグルドの姿を見て、ミレーネの表情が暗く陰った。顔色は確か
に良くなってきたているが、憂いを帯びた表情に、シグルドは眉根を
寄せた。

「どうされました？ 具合でも悪いのですか？」

訊かれて、ミレーネは静かに首を左右に振った。しかし元気の無
い顔に不安になりつつ、少女の隣に寄る。

「唐突に申し訳ありませんが、シグルド様にお話が有るのです」

哀しげではあるが、どこか強い意志を秘めたような顔つきに変わ
ったミレーネを見て、シグルドは人払いをした。付き人や召使いが
部屋を出、気配が遠ざかるのを確認して、シグルドは口を開いた。

「一体どうなされた」

シグルドの真剣な眼差しに圧されたか、ミレーネは少しの間口を
つぶんだが、やがて口を開いて瞳に涙を潤ませた。

「無礼を承知で申し上げます。シグルド様、私との婚約を取りやめ
るよう、国王様をお願いしていただけませんか」

懇願するミレーネをシグルドは驚いたような表情で見つめた。先
ほどファーニヤが見せた暗い表情は、これを意味していたのか。そ
れはシグルドにとっても願ってもない事ではあるが、果たして父が
その様な事に聴く耳を持つかどうか。

しばらく考えていたシグルドだが、ミレーネの瞳を真っ直ぐに見
つめながら、一つ質問をした。

「私との婚約が、それほど嫌だ？」

「私には、故郷に心に決めた人が居ます。このまま望まぬ結婚をしても、シグルド様も私も、決して幸せにはなれないと、そう思ったのです」

意地の悪いシグルドの問いに、ミレーネは真つ直ぐに彼の目を見据えながら、そう答えた。これで口籠る様なら、望まぬ結婚を押し付けられているシグルドもミレーネの言う事を黙殺するつもりだったが、なるほどすっかりとした決意を持っているなと頷いた。

政略結婚とは、本来「当人達が幸せになる」為のものではない。それくらいはシグルドも分かっている。しかし十八の少女に、呪いで伏せている最中に何も知らされぬまま話を進められて、政略結婚させられそうになっている現実を、受け止めると言うほうが無体な話である。

「良く分かった、ミレーネ殿。意地の悪い質問をして悪かった」

シグルドは立ち上がると、ミレーネに優しく笑いかけた。

「明日、父に話してみる。正直な所、私……いや、俺も、この結婚には反対だ。何としてでも説得してみせよう」

どうも堅苦しいのは合わんな、とニツと笑うと、ミレーネは大粒の涙を流しながら、シグルドに深く頭を下げた。それ以上は何も言わず、シグルドは部屋を後にした。背中から聞こえる嗚咽交じりの「ありがとうございます」という言葉に、シグルドは心の中で優しく笑っていた。

しかし、あの父王がそう簡単に婚約取り下げを受理するとは思えない。しかし約束してしまった以上、守り通すのが騎士道であると、シグルドは気合を入れた。

第十四章「終幕」

「父上、ミレーネ殿との婚姻の件、取り下げて頂きたい」

シグルドが突然言い放ったこの一言に、兄ドノヴァンはこめかみを押さえ、レイディルは片眉をぴくりと動かし、ファーニャは納得したような顔をした。

翌日、昨日と同じ顔ぶれに加え、ミレーネも加えた八人が、王室に顔を並べていた。ミレーネには部屋で休んでいるように言ったが、どうしても言い張るので、ファーニャが支えるようにして連れてきたのである。

「シグルド、もう一度言ってみよ」

レイディルの鷹の目の様な鋭い眼光がシグルドを射抜いたが、ここで下がってはならないとシグルドは一步前に出た。

「ミレーネ殿との婚姻の件を、取り下げて頂きたいと、そう申し上げたのです」

さらに語気に力を込めると、レイディルの目が怒りの炎で燃え上がった。

「今更何を言う、シグルド。お前には旅立ちの前に教えたはずだ。

これは王命だぞ」

「それは承知しております。が、しかし」

一度言葉を切り、大きく深呼吸をするシグルド。剣を使った戦いならば彼の右に出る者は居ないが、言い争いは狡猾な父王の十八番だ。気を取り乱してはならないと、心を落ち着かせる。

「ミレーネ殿も私も、望まぬ結婚に戸惑っております。このまま結婚した所で、私たちの未来は暗いものになるでしょう。私は王族としての義務としてそれを受け入れる事が出来ませんが、ミレーネ殿はどうなります」

後半は口から出任せの嘘っぱちである。受け入れる事など出来るわけが無い。

レイディルの漆黒の双眸が、更に深い光を帯びた。抜き身の刃を連想させる鋭さに、思わずシグルドは負けそうになる。

「望もうと望まぬとも、政略結婚とはそういうものだ。王族であるお前が、それくらいのを分からぬ訳は、なかるうな」

ぐつと言葉に詰まったが、負けてたまるかと、シグルドは肺の中の空気を全てぶち撒ける勢いで、

「分からないわけではありません！ しかし、こんな事をミレーネ殿に押し付けるには、彼女はまだ若すぎます！ 若い女性の未来を奪うような真似は、俺はしたくありません！ 心から愛する者と一緒になる方が、幸せになれるでしょう！」

すっかり地を出してしまいながらも、構わずに大声で叫んだ。あまりの剣幕に、レイディルが片手で耳を塞いで渋い顔をした。傍から見守っていたドノヴァン達も、シグルドの声に圧倒されていた。

しばらく王室は静まり返ったが、レイディルがすつと手を突き出し、シグルドを鋭く睨み付けた。心臓を冷たい手で握りつぶされるような、そんな感じがして、背筋に冷たいものが走った。殺気にも似ている。

「では問おう。そこまで言うのなら、シグルド、お前には居ると言うのか？ その「心から愛する者」とやらが」

レイディルの容赦無い問いかけに、再びシグルドは喉を詰まらせた。思考回路を一杯回転させたが、咄嗟に良い策が浮かんでこない。しかしこの場を切り抜けなければ、シグルドとミレーネの未来は決定付けられてしまう。

こうなったらやけくそだ、とシグルドは傍に立っていた女の細腕を握り、ぐいっと引き寄せた。

「ええ、居ますとも！ 今、ここに！」

引つ張られたラケシスが、信じられない様子で目をしばたかせた。突然の人選に、レイディルは目を見開き、ドノヴァンは驚きの表情のまま固まり、ファーニヤは口に手を当ててシグルドを凝視し、ソラスは「むう」と小さく唸って二人を交互に見やり、ドルチェも

流石に驚いたのか、氷の様な表情を崩した。

それぞれ別々の反応を見たシグルドは若干の後悔を覚えたが、ラケシスなら「なんでシグルドなんかと！」と駄々をこねるに決まっている。今だけは、悪いが付き合ってもらおうしかない。弁明なり謝罪なりは、後ですれば良いことだ。

そう思っていたのだが。

「ほ、本当に私で良いの？ シグルド」

ラケシスから返ってきた答えを聴いて、今度はシグルドがぎよつとした。

ちよつと待て、本気にしているのか、と目で訴えたが、ラケシスは雨に濡れた子犬の様な潤んだ目で、少し頬を紅潮させながら、シグルドを真っ直ぐに見つめていた。

ラケシスが自分に懐いていたのは、シグルドもよく分かっていた。しかしまさか、彼女の気持ちが生愛の域まで達していたことには、全く気付いていなかった。

ミレーネの呪いを断った時から機嫌が悪そうだったのも、例えばミレーネに対する嫉妬だったのかも知れない。いや、それ以前に、「結婚してるの？」だとか「私の事を忘れないって、約束してくれる？」だとか、それらのあの森での会話は、ひよつとするとシグルドの気持ちを探っていたのかもしれない。

完全に誤算だったし予想外だった、と後悔するシグルドに、ラケシスは抱きついてきた。

「本当の本当に、私で良いの？」

さつきと同じ質問を投げかけてくる。今更後に引けなくなったシグルドは、「ああ、その通りだとも」と、搾り出すような声で言った。

ふむ、と誰かが唸った。レイディルだった。

「やはりそうだったか」

納得したように、うんうんと首を上下させる。

まさか！ とシグルドは、胸の奥で嫌な予感がしたのを感じた。

「昨日、お前がミレーネ殿に会いに行っている間、ソラス殿とラケシス殿、ドルチェ殿と話をし、お前の旅についての事を聴いていたのだが」

ああ、とシグルドは心の中で嘆いた。嫌な予感ほどよく当たる、とは言うが、予感と言うよりも確信に近いものがあった。

「ラケシス殿は、道中お前によくしてもらったと語っておられた。お前に助けられた事、楽しかった事など、色々と教えて貰っていた。それゆえ、まさかとは思っていたのだが……」

見え透いた方便だ。わざとらしい間を空けながら、芝居がかった口調で喋る父親を、心底殴り倒したいと思った。

「ソラス殿、よろしいかな？」

レイディルに振られ、ソラスは口をつぐんで唸っていたが、シグルドにつかつかと歩み寄ると、両肩をがっしと掴み、

「ラケシスは私の可愛い娘だ。強情で子供っぽい所も有るが、かけがえの無い私の宝だ。貴殿はとも彼女の事を理解してくれていると思うが、これだけは肝に銘じておいてくれ」

シグルドの気持ちを知ってか知らずか、優しい口調でそこまで言うくと、ソラスは表情を一変させた。優しい笑顔から、怒ったような泣き出しそうな、そんな表情に。物悲しい様な憤るような、様々な感情を混じらせたような瞳でシグルドを見据え、続けた。

「ラケシスに哀しい思いをさせたら、その時は容赦なく貴殿を滅ぼすぞ」

シグルドの肩から、かくんと力が抜けた。

我ながら取り返しのつかない事を言ってしまったと、即刻この場を逃げ出して、泣き出したい気分だった。

エピソード

その日、空は澄み切っていた。

雲一つ無い青空だったが、シグルドはぼんやりと、自室に籠って空を行く鳥を眺めていた。

その後 ラケシスへの衝撃の告白の後、確かにミレーネとの婚姻は取り下げられた。ミレーネは喜び、ラケシスも喜んでいた。

後にレイディルから教えられたのは、元よりミレーネとの婚姻話に抗議が来るのは、既に見越していた事だと言う事。シグルドを除いた談話が、実はシグルドとラケシスについての今後の話になっていた事。つまり、旅立ちの時と同じく、シグルドは父の思惑に、まんと嵌まってしまったのである。

更にはミレーネの治療費として、既に国家予算二年分に相当する金が、レフィア家から届いているという事も聞いた。政略結婚など、初めからする気は無かったのではないかと思っただが、そう問うてみると、

「お前が伝説の魔術師ソラス・ナクル殿を連れてきたのは、流石に予想の域を遥かに超えていた。だが、結果最も良い方法を取れるようになって満足しておるぞ」

と父王に笑い混じりで言われ、情けなくなった。

国益際優先である父にとって、シグルドの結婚相手が人形だろうと何だろうと構わないのだろう。伝説の大魔術師を後盾に付ける機会とあっては、レイディルも息子を人身御供ひとみくわうにする事に躊躇はない。

ミレーネの治療費だけでも国庫は潤い、大魔術師を後盾に出来て、レイディルは笑いの止まらない事だろう。思わず「あの糞親父」と、王族らしからぬ言葉を心の中で吐き捨てた。

不意に、コンコンと扉をノックする音が聞こえた。面持ちを正す

気にもなれず、ぶつきらぼうに「入れ」とだけ言つと、勢い良く扉を開けながら、嬉しそうにはしゃぐラケシスが入ってきた。

「見てよ、シグルド、これ！」

そう言つて、くるりと一回転する。侍女に見繕つて貰つたのか、ラケシスは薄紅色の、フリルが沢山ついた可愛らしいドレスを着ていた。陽光を受けて輝く金髪に、瞳と同じ翡翠色の髪留めが、よく似合つた。

「よく似合っているぞ」

シグルドが言つと、ラケシスは嬉しそうにシグルドに飛びつ……こうとして、ドレスの裾を踏んで転びそうになつた。慌てて咄嗟に駆け出したシグルドが、ラケシスの体を支え、床に額を打ち付ける直前で止めた。

「全く、危なっかしい娘だ」

ふう、と短く溜息をつくと、ラケシスが「ごめんなさい」と肩を落とした。何も言わずに優しく頭を撫でてやり、窓辺に戻る。今度は転ばないように、慎重にラケシスが歩いてきて、シグルドに寄り添つた。

しばらく呆けるように外を眺めていたシグルドを、ラケシスはじつと見ていたが、突然シグルドの服の裾を引っ張つて、訊いてきた。「ねえ、シグルド。私の事は嫌い？ それとも、好き？」

唐突に訊かれて、思わずシグルドは口籠つた。

嫌いではない。かと言つて、愛しているのかと訊かれると返答に困る。良くも悪くも、子供のように単純で純粋なラケシスは、ストリートに感情を表してくる。

だが、シグルドの中にはまだ自分でもよく分からない感情が有つた。それは自分でも分かつている。ラケシスを見ていると、どうにも危なっかしくて、ついつい構つてやりたくなるのだ。これを保護欲と呼ぶべきか、それとも愛と呼ぶべきか、シグルドにはよく分かんかった。

少しだけ考えて、重い息を吐き出しながら、

「嫌いではない。しかし好きかと訊かれたら、よく分からない。俺自身、まだお前の事をよく分かっていないせいなのかも知れないが、正直な所、自分の気持ちに整理がついていないのだと思う。答えは、いずれ、気持ちの整理をつけてから、お前に話したいと思っているが……」

「逃げるような返答だったが、シグルドの本心だった。ラケシスは少しだけ考えたが、「うん、分かった」とシグルドに向かって、太陽に似た笑顔を返した。

窓の外を眺めながら、「綺麗だね」とラケシスが呟いた。

空はあの時、ラケシスと出会い、夜が明けた時と同じように、突き抜ける様な青い空だった。

エピローグ（後書き）

何の捻りも無いラストに不満を持つ方、それ以前に文法のヘタレ具合やらに苦情がある方も多く見えると思いますが、久々に小説書いた為のリハビリ的作品ということで、一つご容赦を（苦しい言い訳）

もっと色々なシチュエーションを織り交ぜたかったのですが、あまりダラダラと続かせるのも何だかなと思います、割とシエイプアップして投下させて頂いた今作品ですが、書き初めて四日で書き終えるとは、流石に自分でも信じられないくらいです。睡眠時間も忘れて書きまくったりとか。まあ内容は、それなりに薄っぺらい感じなんですg(汗)

細かく章立てしたのも、ありきたりな話ですので、絵本を読む感じで読んで頂ければなあと思つての配慮だったりしたのですが、短く切りすぎた感も有りで……正直、所々失敗しまくってる感が否めないのですがorz

何にせよ、少しでも楽しんでもらえた方が居れば幸いです。感想などお寄せ頂ければ、泣いて感謝してメッセージ文プリントアウトして家宝にします。

最後に、物語の最後までお付き合い頂いた読者の皆様、本当に有難うございました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0120c/>

幸せの、澄み切った、青い空

2008年11月7日06時32分発行